平城京 左京四條四坊 九坪

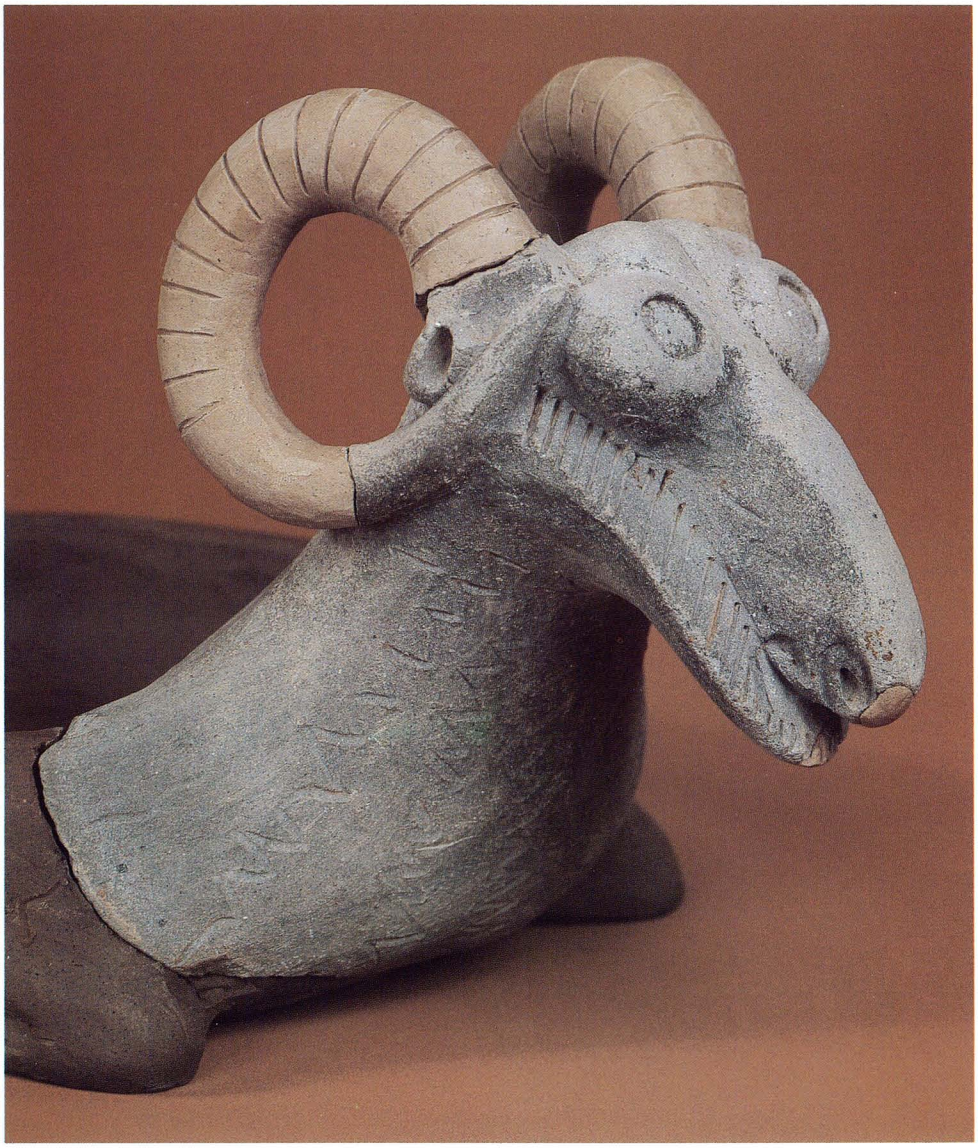
発掘調査報告

奈良国立文化財研究所編

平城京 左京四條四坊 九坪

発掘調査報告

奈良国立文化財研究所編



羊形硯　掘立柱建物ＳＢ2393柱穴出土

序

昭和27年に奈良国立文化財研究所が発足し、昨年で30周年を迎えた。研究所創設当時の奈良は、現在からは想像もつかないのどかな田園風景に囲まれ、まさしく文化財の宝庫にふさわしい環境のもとにあった。しかし近年の開発の波はこの奈良の地にも押しよせ、長年保たれてきた古都奈良の景観を徐々に変えつつある。こうした奈良の変貌にともない、平城京内の発掘調査件数も年毎に増加の一途を辿っており、当研究所もその調査研究に追われているのが現状である。

今回発掘調査をおこなった奈良市三条宮前町周辺は、奈良市街地の拡大にともない特に開発の進行した地域であり、また平城京内でも発掘調査の手が及んでいない未知の一画であった。この地は奇しくも昭和54年に旧添上郡田原の里で発見された太安萬侶の墓誌に記された平城京左京四条四坊にあたり、一躍世間の注目を集めた地域でもある。このたび白藤学園の校舎改築に際し、学校法人白藤学園及び施工者株式会社浅川組の御協力のもとに、当研究所が事前に発掘調査を実施する運びとなった。

調査の結果得られた成果は本書に詳しく述べられているが、多くの遺構とともに羊をかたどった形象硯、銭差にさし貫いた状態の和同開珎など予想外の貴重な遺物を発見し、左京四条四坊における土地利用状況の一端を明らかにすることができた。今回発見された遺構が太安萬侶の邸宅の一部を構成するものであるかどうかに関しては、調査面積が狭小なため断定に至る積極的な資料を得ることができなかった。今後の周辺地域における調査の進展が強く望まれる次第である。

昭和58年３月25日

奈良国立文化財研究所長

坪　井　清　足

目　　次

Ⅰ　序　章

頁

調査の経過と概要……1

Ⅱ　遺　構

1　遺跡の概観……3

2　遺構……4

Ⅲ　遺　物

1　土器類……8

2　屋瓦……28

3　銭貨……29

4　採取遺物・遺構の保存……30

Ⅳ　まとめ

1　東四坊々間路……32

2　九坪周囲の条坊復原……33

3　占地と時期区分……35

4　左京四条四坊の居住者と京内の宅地構成……37

5　結語……40

写真図版

巻頭写真　掘立柱建物ＳＢ2393柱穴出土羊形硯

ＰＬ．1(1)　天平時代の食器構成

(2)　ＳＫ2408銅銭出土状態

ＰＬ．2　調査地周辺航空写真（1/7000）

ＰＬ．3　調査地周辺航空写真（1/3000）

ＰＬ．4(1)　調査区東半部全景

(2)　調査区東半部の遺構

ＰＬ．5(1)　ＳＢ2390

(2)　ＳＢ2392・2393

ＰＬ．6(1)　ＳＤ2401・ＳＡ2402

(2)　ＳＢ2390

ＰＬ．7(1)　調査区西半部全景

(2)　調査区西半部の遺構

ＰＬ．8(1)　ＳＢ2395・ＳＢ2396・ＳＡ2405

(2)　ＳＢ2395・ＳＡ2405

ＰＬ．9(1)　東四坊々間路

(2)　東四坊々間路と西半部の遺構

表

頁

tab．1　墨書土器一覧……20

tab．2　出土土器の構成一覧……27

tab．3　ＳＫ2412出土土器個体数表……27

tab．4　平城京の宅地割遺構……39

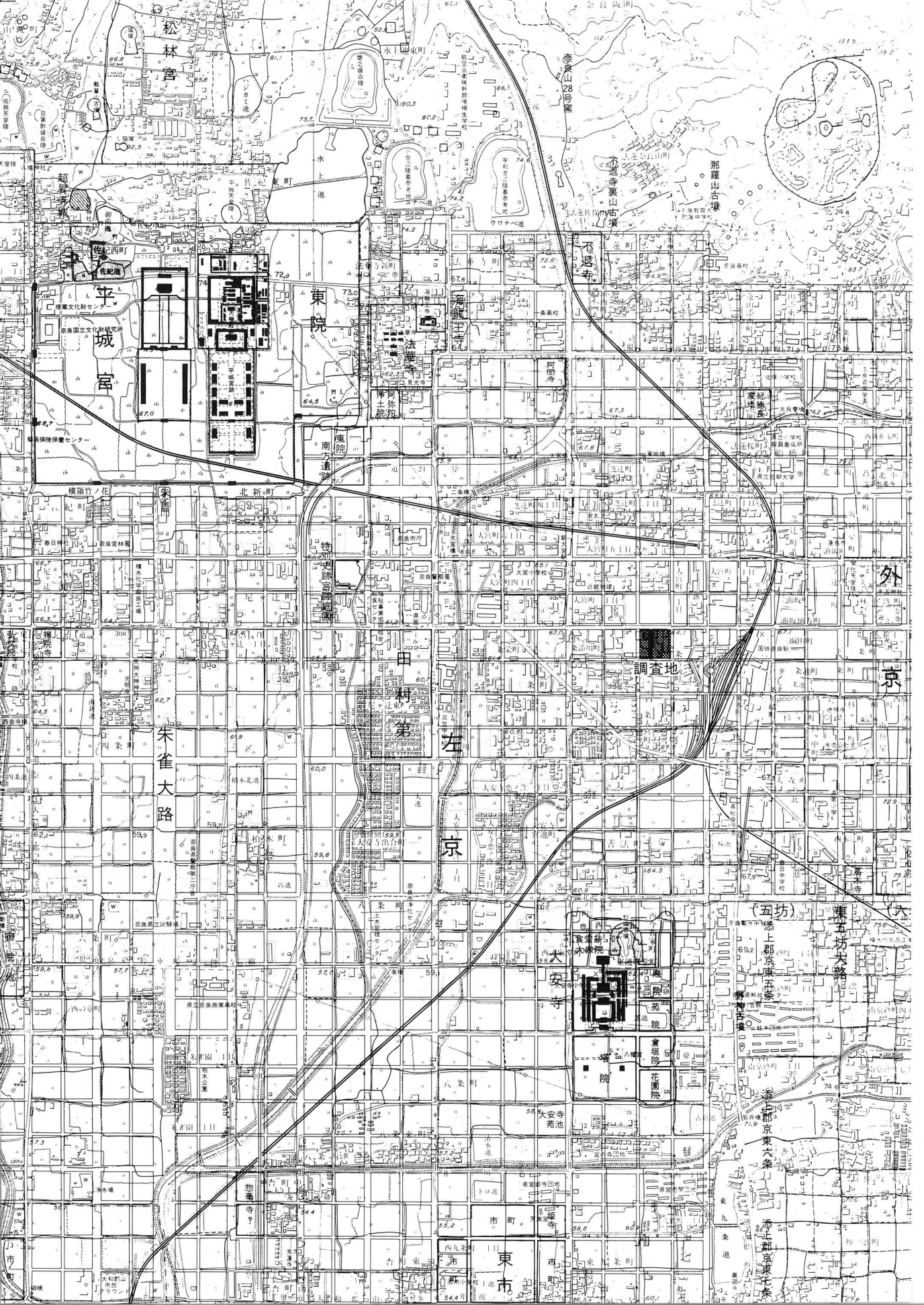
挿　図

頁

fig. 1　調査地位置図
fig. 2　調査地周辺図……1
fig. 3　遺跡を見学する生徒たち……2
fig. 4　発掘調査風景……2
fig. 5　調査地周辺航空写真……3
fig. 6　遺構配置図……4・5
fig. 7　ＳＢ2390柱根残存状態……7
fig. 8　羊形硯出土状態……7
fig. 9　器種一覧……8
fig. 10　ＳＫ2407・2408、ＳＤ2401、ＳＫ2406出土土器実測図……11
fig. 11　ＳＫ2412出土土器実測図(1)……12
fig. 12　ＳＫ2412出土土器実測図(2)……13
fig. 13　ＳＫ2412出土食器セット……15
fig. 14　ＳＫ2412出土土器実測図(3)……16
fig. 15　ＳＫ2410出土土器実測図……18
fig. 16　ＳＫ2409・ＳＫ2411・ＳＫ2413・ＳＫ2414・包含層出土土器実測図…19
fig. 17　墨書土器……20
fig. 18　墨書土器実測図……21
fig. 19　三彩小壷実測図……22
fig. 20　ミニチュア土器実測図……22
fig. 21　土馬実測図……22
fig. 22　各遺構出土土器……23
fig. 23　羊形硯実測図……24・25
fig. 24　羊形参考資料……25
fig. 25　出土軒瓦拓本……28
fig. 26　ＳＢ2390出土銭……29
fig. 27　銅銭出土状態実測図……29
fig. 28　柱穴根巻石の保存処置……30
fig. 29　和同開珎の保存処理……31
fig. 30　調査地周辺航空写真……33
fig. 31　調査地周辺の地形と条坊……34
fig. 32　九坪の占地概念図……35
fig. 33　遺構の時期変遷図……35
fig. 34　太安萬侶墓誌……37
fig. 35　平城京貫籍者の位階の分布……39
巻末折込　平城京左京四条四坊九坪実測図

例　　言

1. 本書は奈良市三条宮前町に位置する平城京左京四条四坊九坪の発掘調査報告である。
2. この調査は、白藤学園の校舎増改築に伴う事前調査として、奈良県教育委員会の委託を受けた奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が昭和57年６月28日～７月10日にかけて実施したものである。
3. 調査には工楽善通・田中哲雄・山本忠尚・西弘海・今泉隆雄・上野邦一・千田剛道・巽淳一郎・山岸常人・松村恵司・本中真・佐藤信・松井章・深沢芳樹が参加した。
   調査にあたっては、学校法人白藤学園・奈良県教育委員会事務局の全面的な協力を得た。
4. 本書の作成は、当調査部長岡田英男の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議を経て以下のように分担執筆した。
   Ⅰ：工楽善通、Ⅱ・Ⅳ－３：巽淳一郎、Ⅲ－１：西弘海、Ⅲ－２：山本忠尚、Ⅲ－３・Ⅳ－２・５：松村恵司、Ⅲ－４：沢田正昭、Ⅳ－１：田中哲雄、Ⅳ－４：佐藤信
5. 遺構・遺物・図版の写真は佃幹雄が担当し、八幡扶桑、池田千賀枝の協力を得た。
   また奈良県立橿原考古学研究所より、太安萬侶墓誌写真の提供をいただいた。
6. 本調査は、平城宮跡発掘調査部の第141－９次調査に該当する。各遺構には平城京左京における調査規準に従い一連の通し番号を付した。
7. 本書の編集は松村恵司が担当した。


松林宮
奈良山28号窯
不退寺裏山古墳
那羅山古墳
不退寺
超昇寺跡
佐紀西町
佐紀陵
平城宮
東院
法華寺
阿弥陀浄土院
阿閦寺
紀勝長家墓
東院南方遺跡
横領竹ノ花
北新町
奈良市役所
特別史跡平城宮跡
調査地
外京
朱雀大路
第一次
大安寺
食堂
講堂
僧房
倉垣院
花園院
大安寺苑池
(五坊)
東五坊大路
添上郡京東五条
添上郡京東六条
添上郡京東七条
物部寺?
東市
市町
西九条町

Ⅰ 序 章

調査の経過と概要

伝統ある白藤学園が1983年10月に創立90周年を迎えるにあたり、その記念事業の一つとして、既存校舎のうち講堂をはじめいくつかの建物を除去し、鉄筋６階建の新校舎を建設することになった。そこで学園は、奈良県教育委員会と善後策につき協議を進め、工事に伴う発掘届を提出した。当地付近は、1979年に奈良市此瀬町の茶畑から発見された太安萬侶墓の墓誌に記されている平城京左京四条四坊にあたり、同氏の居住地でもあることから、県教育委員会は当該地の発掘調査の必要性を痛感し、奈良国立文化財研究所との間で、調査をする方法に種々検討を加えた。その結果、1982年６月中旬すぎから発掘調査を開始することとし、調査費用は学園側が負担することとなった。

白藤学園は1928年９月に現在地である奈良市三条宮前町３丁目６番地に位置するようになり、いまでは10,005㎡の敷地を占めている。国鉄奈良駅の西方約400ｍにあり、1890年代に開通した鉄道線の西側一帯は、当時はまだ民家のまったくない田園であった。1955年撮影の航空写真（PL.２）をみても、奈良駅西側にはまだ水田が多く、現在のような過密な状態は想像もつかない。

調査地は、平城京の左京四条四坊九坪にあたり、校地の北側には三条大路が通り、校地

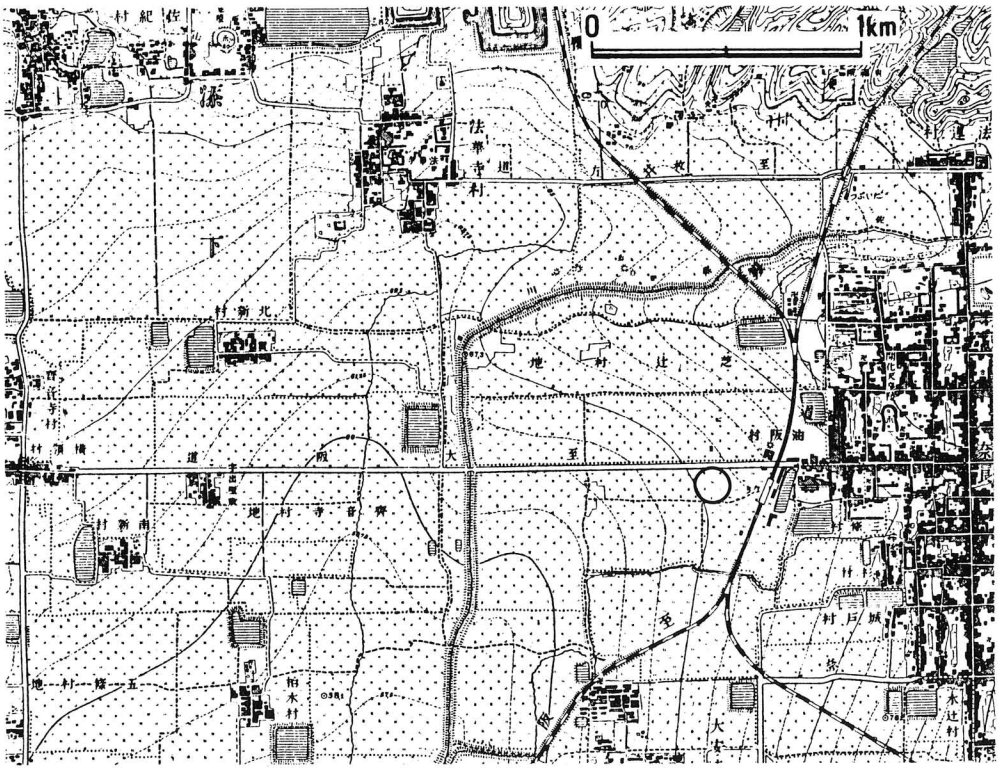


fig.２　調査地周辺図（明治20年測量 同31年修正・発行）

◀fig.１　調査地位置図（奈良市作成「平城京条坊復原図」による）

中ほどを東四坊の坊間路が南北に通る。新築予定の校舎は敷地の東半部を占め、発掘調査はこの建設用地のうち計620㎡にわたって行なった。調査地は、学校用地として土盛りをされているため、調査員立ち会いのうえ、重機を使用して旧耕作土下の床土の一部まで排土した。人力による発掘調査は、6月28日から開始し、遺構検出ののち写真撮影、遺構実測と進め、7月10日をもって終了した。埋め戻しは再び重機により翌日行なった。

発掘調査にあたっては、当研究所で行なっている京内条坊にもとづいた地区割にしたがって、6ＡＦＫ－Ｈ地区と定めた。さらに国土方眼座標（第6座標系）の基準点（Ｘ＝－146,589.0、Ｙ＝－16,690.0）をHN83として、3ｍ方眼の小地区を設定したうえ、発掘遺構の記録や遺物取り上げの地区名とした。調査は新校舎予定地の東半部、すなわち坊内九坪に中心をおき、校地中央部に予想される坊間路の検出をもねらい西方に発掘区を延ばして逆Ｌ字形に約400㎡を当初発掘した。その後、遺構検出の進行にともない、東部・北部・西部などの一部を若干拡張したため、発掘面積は合計620㎡となった。

調査地は以前には水田であったため、その後の校地造成時の盛土が全体にわたって約25㎝ある。旧水田の耕土下には床土層が約25㎝あり、その下に奈良時代の遺物を包含する厚さ約10㎝の灰褐色土があり、その下部が遺構面となる。発掘区の各所には校舎建設時の撹乱がおよんでおり、特に発掘区の西側では旧校舎の基礎が遺構面深くにまで達していた。しかしながら全体として遺構の保存状態は良く、多数の遺構を検出することができた。今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物8棟、塀5条、土壙9基、坊間路路面とその東西両側溝などで、これらはすべて奈良時代に属するものである。

fig.3　遺跡を見学する生徒たち

fig.4　発掘調査風景

Ⅱ 遺 構

1. 遺跡の概観

国鉄奈良駅西側の調査地付近は、現在では商店と民家が建ち並ぶ市街地と化し、その地形的特徴を窺うことができないが、東から西へ緩く傾斜する地形にあり、佐保川と能登川が第四紀に入って形成した複合扇状地の末端部に位置し、現地表面標高は60.2ｍである。

調査地の基本的な層位は、地表から１：校舎建設に伴なう客土層、２：旧水田の耕土および床土層、３：遺物を包含する黄灰～灰褐色の砂質土層、４：黄褐色粘土層の順であり、現地表下約0.6ｍの黄褐色粘土層上面において遺構検出を行なった。黄褐色粘土層は薄く不安定な層であり、調査区西端では、拳大の礫を含む堅くしまったバラス層に移行し、南東部では部分的に消失する。また、北東から南西に向かって緩やかに下降しており、この緩傾斜面を埋める形で遺物包含層が水平に堆積する。遺構の掘り込み面は検出面にほぼ一致する。

土層観察のため、東西トレンチ西側において深掘りを行なった結果、西端の遺構面に一部露出するバラス層（無遺物層）が東に向かって急激に下降する状況を把握した。その斜面には粘土と砂が互層をなして堆積しており、この地域にかつて河川の存在したことを示している。奈良時代の遺構面である黄褐色粘土層は、この旧河川の最上層の堆積とみられ、微量ではあるが弥生土器や古墳時代の土師器を包含している。

fig. 5　調査地周辺航空写真（南東上空より白藤学園・平城宮跡方面を望む）

2. 遺　構　(fig. 6，PL. 4～9)

検出した主要な遺構はすべて奈良時代に属するもので、東四坊坊間路をはじめ、掘立柱建物８棟、掘立柱塀５条、溝３条、土壙などがある。以下、遺構の種類毎に解説する。遺構には、一連の番号を付し、遺構の種別を表わすため、ＳＢ―建物、ＳＡ―塀、ＳＤ―溝、ＳＫ―土壙、ＳＦ―道路等の記号を遺構番号の前に付して標記する。

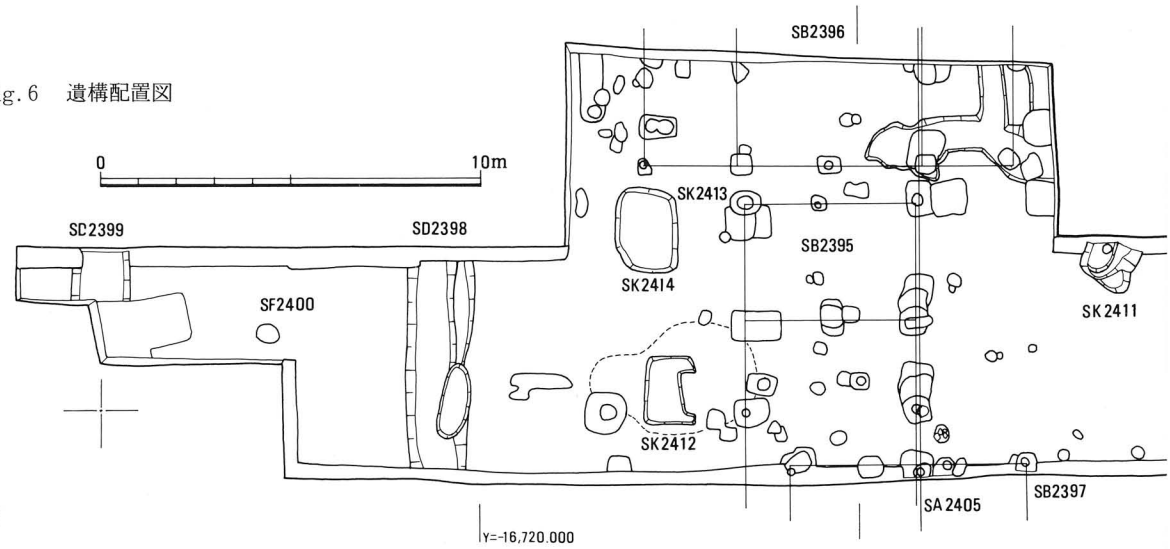
掘立柱建物

SB2390　南北トレンチ東辺に位置する南北棟建物。桁行５間（2.25 m等間)、梁間２間（2.4 m等間）で、身舎の東と南に廂を持ち、全体として６×３間の規模となる。身舎の南妻から数えて２間目に間仕切がある。廂の出は、東廂が3.0 m、南廂は2.4 mで、桁行総長は13.65 m、梁間総長が7.8 mとなる。掘形は一辺60～80cmの矩形を呈すが、南廂の柱掘形はやや小さい。身舎部に残る柱根は径約27cmを測るが、東廂の柱根は、それよりもやや細く径約20cmを測る。身舎の西北隅の柱穴と東北隅の柱穴には、柱痕跡のまわりに割石と平瓦片で巻いた根巻状の工作が見られる。礎板が存在した柱穴は、身舎西北隅の柱穴と間仕切部の柱穴であり、いずれも板材を使用している。西北隅の礎板は残りが良く、長さ約120 cm、幅約24cmの板材で、前述した根固め状施設の下に水平に置かれている。柱穴の深さは、多くは遺構面から60～80cm程度であるが、礎板が存在した前述の柱穴は浅く、遺構面から20cm程度で底にいたる。なお、身舎東北隅の柱穴から地鎮具と考えられる和同銭１枚が出土した。このＳＢ2390は、天平勝宝～天平宝字年間頃の土器を包含する土壙ＳＫ2406を切って建てられている。

SB2391　南北トレンチ南辺部にあり、ＳＢ2390と重複する掘立柱建物。桁行１間分（2.4 m)、梁間２間（1.8 m等間）を検出した。北側柱列の柱穴は、ＳＢ2390の掘形に大きく切られている。

SB2392Ａ・Ｂ　南北トレンチ南西部にある２間×２間の総柱の掘立柱建物。柱間は東西方

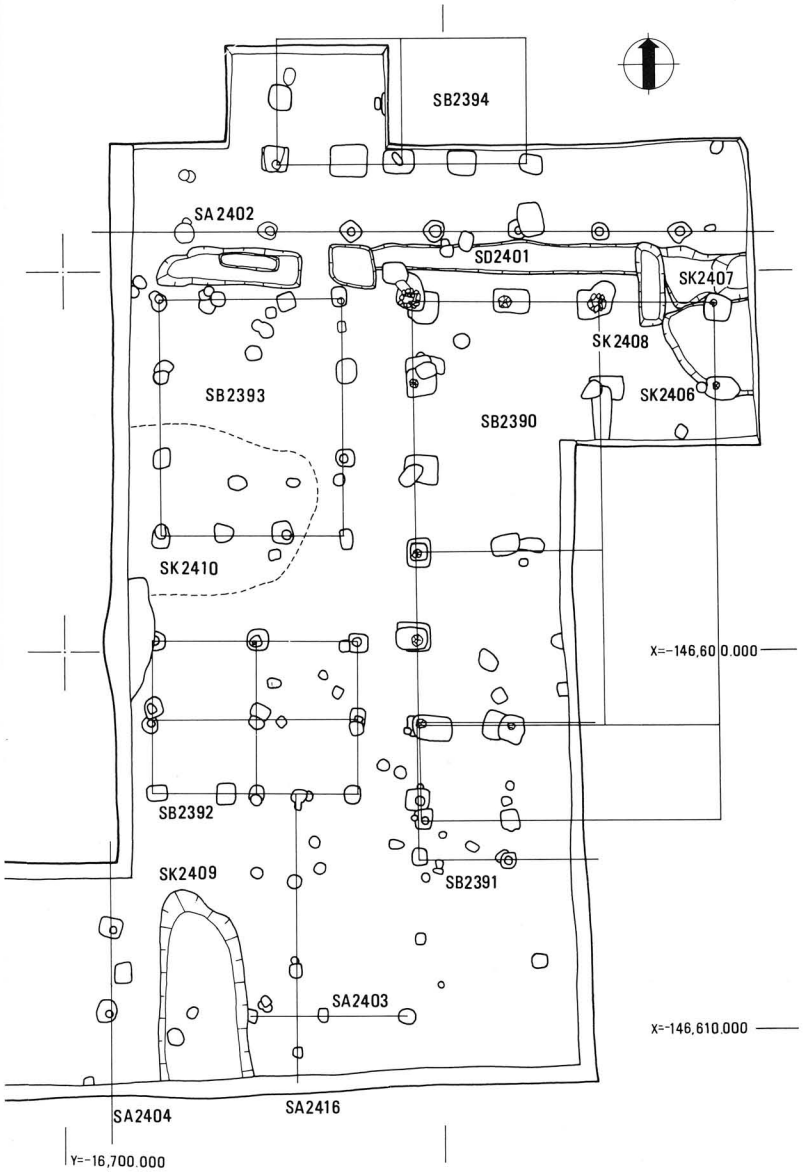
fig. 6　遺構配置図



向が2.7ｍ（９尺）等間、南北方向が2.1ｍ（７尺）等間。東西方向の中央柱列の南側に小さな掘形が重複する。この列の柱だけを取替えて組み替えたのであろう（SB2392B）。

SB 2392A・Bともに柱穴は一辺約40㎝、深さ約50㎝の小形の掘形で、Aの北側柱列中央掘形とBの西側柱列の中央掘形に、それぞれ径10㎝未満の細い柱根をとどめる。柱間や柱の配置から倉庫風の建物と考えられる。柱掘形埋土中には、奈良時代前半期の土器片が含まれている。

SB2393　南北トレンチ北西部にある桁行３間（6.3ｍ）、梁間３間（4.8ｍ）の南北棟建物。柱間は、桁行が７尺等間、梁間は中央間６尺、両脇間５尺となる。奈良時代前半期の土壙SK 2410を切って建てられる。SB2392と同様に小さな柱穴であるが、掘形埋土中に多量の土器片を含む。中でも注目すべきものは、南妻柱列の東第２柱穴の西壁際から出土した羊形硯である。この柱穴の柱痕跡は掘形の東南隅に存在するところから、後世の混入品とは考えがたく、建物の建設時に掘形の埋土中に偶然まぎれこんだものか、あるいは意識的に埋納されたものであろう。掘形出土土器はSK 2410出土土器と接合する。



SB2394　南北トレンチ北端にある桁行４間（6.6ｍ）、梁間２間（3.3ｍ）以上の東西棟建物。中央間に間仕切と考えられる柱穴を持つ。柱間が1.65ｍ等間と狭い割には柱掘形が大きく、一辺約0.7ｍ程の矩形を呈す。南側柱列の東第三・第四柱穴の掘形埋土から奈良時代前半期の土器片が出土している。

SB 2395　東西トレンチ中央にある南北棟建物。桁行２間（4.8ｍ）以上、梁間２間（4.5ｍ）の身舎に北廂が付く。廂の出は3.0ｍで、廂の中央の柱穴は他に比べ小さくやや西側に偏る。柱間寸法は桁行

が2.4 m（8尺）、梁間が2.25 m（7.5尺）である。東側柱列は南北塀ＳＡ2405の柱掘形と抜取穴を切り、また西側柱列は奈良時代前半期の土壙SK 2412を切って掘られる。

SB 2396　東西トレンチ中央北辺にある桁行2間以上、梁間2間の南北棟建物で身舎の東西両面に廂を持つ。柱間は、桁行・梁間・廂の出ともに2.4 m（8尺）等間で、掘形は建物の規模のわりには小さく、一辺50cm未満の方形の掘形である。

SB 2397　東西トレンチ中央の南壁際で検出した掘立柱建物。東西方向に3間分（2.1 m等間）を検出したが、棟方向および規模は不明である。

掘立柱塀

SA 2402　南北トレンチ北辺にある東西方向の掘立柱塀で、6間分（2.2 m等間）を検出した。掘形は一辺50cm前後の小形の掘形で、すべてに径20cm前後の柱痕跡が認められる。

SA 2403　SA 2416に直交する南北塀。2間分（2.1 m等間）を検出した。

SA 2404　東西トレンチ東辺にある南北方向の掘立柱塀。2間分（4.4 m）を検出したが、更に南北にのびる。柱間ならびに柱掘形の形状がSA 2402に似る。柱筋を北に延長させると、ＳＡ2402の柱位置にあたるところから、SA 2402に取りつく可能性が高い。

SA 2405　東西トレンチ中央にある南北方向の掘立柱塀。4間分を検出したが、柱間は南から3間目が3.6 m（12尺）と広く、出入口として使われた可能性がある。他の柱間は、2.4 m（8尺）等間。柱穴は、柱抜取穴が重なるため全容をとどめるものはないが、一辺0.8 m程度の比較的大きい掘形である。南半でSB 2395の掘形に重複する。

SA 2416　南北トレンチ南辺にある南北方向の掘立柱塀で、3間分（2.1 m等間）を検出した。北端はSB 2392南側柱列に取りつく。

土　壙

SK 2406　南北トレンチ北東部にある土壙で、南北幅約2.6 m、東西幅約2 m以上、深さ約0.5 mの不整形な皿状の土壙である。埋土は5層に分かれる。遺構面から約30cm下位には、厚さ2～3 cmの薄い灰層がほぼ水平に堆積する。各層から奈良時代後半期の土器片が出土した。

SK 2407　南北トレンチ東北隅にある不整形な土壙。南半部をSK 2406によって切られるために全形は不明。深さ0.45 m。

SK 2408　南北トレンチ東北隅にある長さ2.2 m、幅0.7 m、深さ0.65 mの長方形土壙。東西溝SD 2401を切って掘られている。土壙の中位から和同開珎約100枚が固まって出土した。奈良時代前半期の土器片を若干出土したが、多くはSD 2401出土土器と接合する。

SK 2409　南北トレンチ南端にある南北長4.9 m以上、幅約2.1 m、深さ0.15 mの浅い土壙。奈良時代末葉の土器片・瓦片が出土。

SK 2410　南北トレンチ西北部にあり、SB 2393に重複する不整形な土壙。奈良時代前半期の土器を多量に出土したが、明確な輪郭を把握しがたい。

SK 2411　東西トレンチ東部の北壁際にある土壙。奈良時代前半期の土器片が少量出土。

SK 2412　東西トレンチ中央にあり、SB 2395 と重複する不整形土壙。当初東西 4 m以上、南北 2.5 m以上の不明瞭な輪郭を捉えたが、掘り進めるに従い縮少して逆「コ」字形の土壙になった。深さ 0.3 m。SB 2410 同様、奈良時代前半期の土器を多量に出土する土器溜りである。

SK 2413　東西トレンチ中央SB 2396 の南にある一辺 0.8 m程の方形土壙。SB 2395 の掘形と重複し、切られている。奈良時代前半期の土器片が少量出土した。

SK 2414　東西トレンチ中央、SK 2412 の北にある幅 1.6 m、長さ 2.2 m、深さ 0.5 mを測る長方形土壙。奈良時代前半期の土器が少量出土している。

溝

SD 2398　東西トレンチ西辺にある幅 1.5～1.75 m、深さ 0.3 mの素掘りの南北溝。東肩に段をもち南半部に撹乱をうける。この溝は八坪と九坪を画す東四坊坊間路の東側溝にあたる。遺物は奈良時代前半期の土器片が少量出土したにすぎない。

SD 2399　東西トレンチ西端にある幅 1.6 mの素掘りの南北溝。深さ 0.25 mを測る。四坊坊間路の西側溝に相当する。

SD 2401　南北トレンチ北辺にある幅 0.8 mを測る素掘りの東西溝。途中で途切れるが溝底レベルは東に向って下降する。坪を南北に 4 分した線上にほぼ位置する。

通路・道路

SF 2400　SD 2398 ・SD 2399 を側溝とする南北方向の道路遺構。平城京条坊の東四坊坊間路にあたる。削平のためか路面上には整地土がみられず、遺構面は地山の灰褐バラス層となる。遺構検出面での路面幅は 7.3 m。東西両側溝の心々距離は 9.0 m（3 丈）を測る。

SF 2415　今回の調査では検出していないが、四坊坊間路東側溝SD 2398 の東に想定できる築地塀もしくは木塀と、SA 2405 との間に存在すると推定される南北方向の通路。

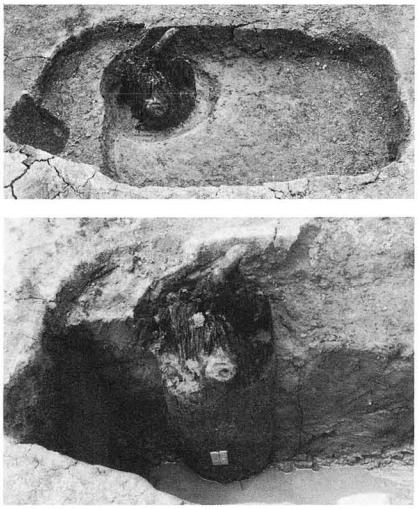


fig. 7　SB 2390 柱根残存状態

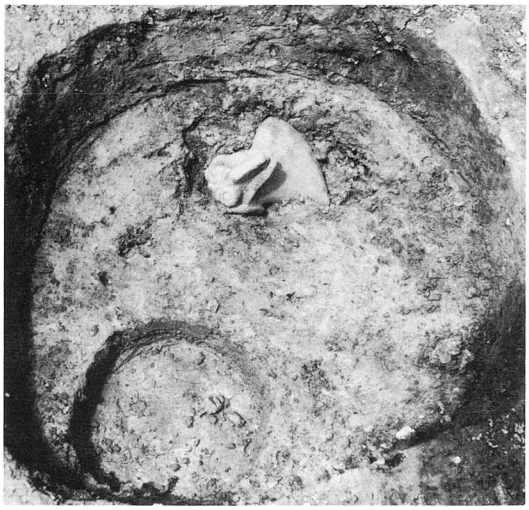


fig. 8　羊形硯出土状態

Ⅲ 遺 物

1. 土 器 類

調査区の全域から、多量の奈良時代の土師器・須恵器が出土した。他に少量であるが、奈良時代の製塩土器、土馬、祭祀用のミニチュア土器、二彩・三彩の鉛釉陶器、須恵器羊形硯と、12～13世紀の瓦器椀・土師器杯がある。出土土器の大半は調査区内に散在する土壙SK 2407・2408・2410・2412、東西溝SD 2401より出土したものであり、いずれも奈良時代前半に属する。これらの土壙・溝の出土土器には互に接合するもの、あるいは明らかに同一個体とみられる破片を含んでおり、奈良時代前半の一時期に、四坊坊間路を除く調査区のほぼ全域が塵芥処理の場として用いられたことを示している。このことは、奈良時代前半期の建物遺構が希少なことと併せて、この地域の性格を考える上に重要な事実であろう。奈良時代後半～末頃には、各時期の建物群に近接して2カ所の土壙SK 2406・2409がつくられた。いずれも奈良時代前半の土器に混って、奈良時代後半～末頃の土器が少量出土している。奈良時代の遺構面を覆う包含層からもかなりの量の土器が出土した。土壙群と同じく奈良時代前半の土器が主体であり、奈良時代後半の土器少量と、数個体の瓦器椀を含む。以下、各遺構の出土土器を中心に説明する。なお、土器の器種名・製作技法の分類と呼称については『平城宮発掘調査報告』に従うこととする（fig. 9）。

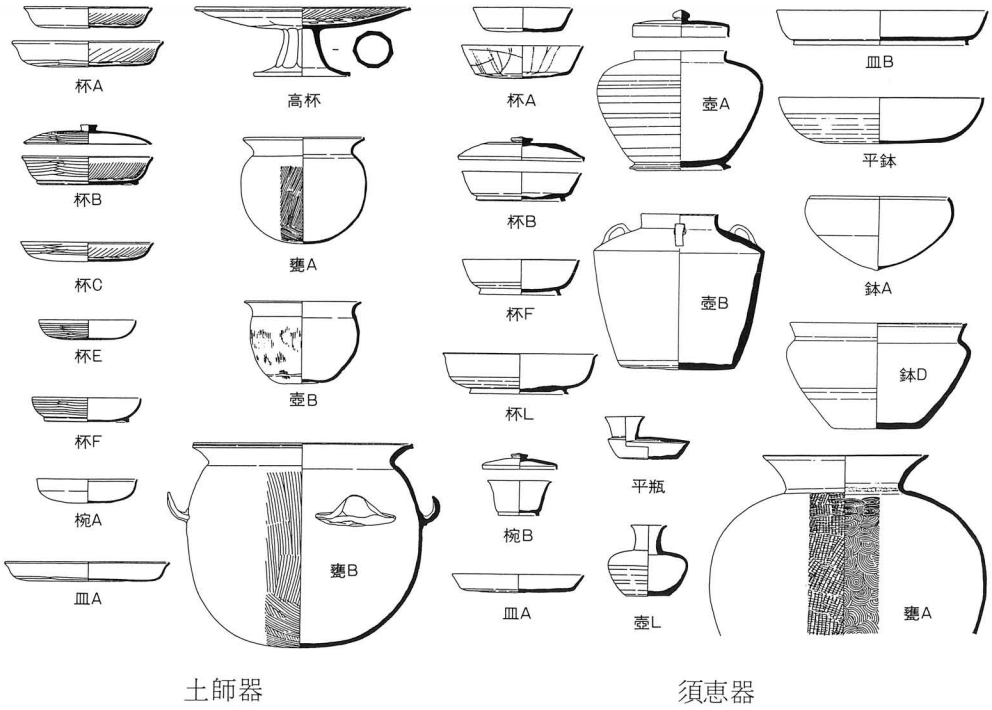


fig. 9　器種一覧

SK 2407・2408 出土土器（fig. 10・22）

土壙SK 2407・2408は東西に接して作られた土壙であり、出土土器もかなりの部分が互に接合する（3・9・10・11・14・15例）。煩雑を避けるため両者の出土土器を併せて説明する。なお、須恵器甕の体部破片では土壙SK 2412 出土土器と直接接合するもの3例があり、この3カ所の土壙の埋没がほぼ同時期であったことがわかる。

土師器　杯A・杯B・杯F・蓋・椀C・皿A・高杯・壷A・壷B・甕A・甕B・製塩土器がある。杯AⅠ（1）は、底部外面をヘラ削りするb_0手法。内面にラセン暗文・方射状暗文（以下ラセン文・放射状文）をもつ。平城宮Ⅰ群土器[(1)]。杯B（4）は、口縁部外面をヘラ磨きするa_1手法。ラセン文・放射状文をもつ。連弧状文の存否は不明。杯F（3）は、底部外面をヘラ削りした後、口縁部外面を密にヘラ磨きする。内面はヨコナデのままで仕上げ、暗文はない。杯B・杯Fともに平城宮Ⅱ群土器（以下Ⅱ群土器）。高杯（6）は縦方向のヘラ削りで脚柱部を10角に面取りする。杯部下面を横方向にヘラ削りし、上面にラセン文と放射状文をもつ。脚裾部はヨコナデして仕上げる。Ⅰ群土器。椀C（5）は内面と口縁部外面上端をヨコナデにして仕上げるe手法。

須恵器　杯A・杯B・杯B蓋・杯L・杯L蓋・椀B・椀B蓋・盤A・鉢A・壷A・壷A蓋・甕A及び甕類の体部破片が少量ある。杯AⅢ（9）・杯AⅣ（7・8）・杯BⅢ(15)・杯BⅤ（12）・椀B（11）はいずれも底部外面ヘラキリのままで不調整。杯BⅣ（13）は底部外面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅢ蓋（14）も頂部上面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。頂部下面中央部が磨耗して墨が付着しており、「杯蓋硯」として使用されたことがわかる。また、椀B（11）と蓋（10）とは、黄灰色の特徴ある胎土と自然釉の状態が酷似することから、同一窯の製品であり、本来一組として作られたものと推定される。須恵器の製作に使用されたロクロの回転方向はいずれも右回転。

SD 2401 出土土器（fig.10・22）

東西溝SD 2401は土壙SK 2407・2408に重複し、これらに先行する溝である。土器の出土量は少ない。なお、SD 2401 出土の須恵器甕の体部破片には土壙SK 2410 出土品と直接接合する例があり、この両者の埋没時期がほぼ同時期であった可能性がある。

土師器　杯A・高杯・蓋・壷A・甕Bがある。杯AⅡ（16）はa手法。Ⅰ群土器。杯AⅡ（17）はb手法。Ⅱ群土器。いずれも内面にラセン文と方射状文をもつ。口縁部外面のヘラ磨きは器面の風化のため不明。

須恵器　杯A・杯B・杯B蓋・皿B・壷A蓋・平瓶・甕類の体部破片がある。杯AⅡ(18)は、底部外面ヘラキリのままで、口縁部内外面に火襷がある。杯BⅢ（23）も底部外面ヘラキリのままの不調整。杯B蓋(19～22）はいずれも頂部上面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。なお、SD 2401 北方の掘立柱建物SB 2394 の南側柱列西第2の柱穴埋土より蓋（22）の破片が出土している。小形の平瓶（24）も底部外面はヘラキリのままの不調整。ロクロはいずれも右回転である。

SK 2406 出土土器（fig. 10・22）

土壙SK 2406は土壙SK 2407の南に接し、SK 2407の埋没後新たに作られた土壙である。土器の出土量はわずかである。土壙SK 2407に一部重複することから、出土土器には新旧の形態が混在し、須恵器甕の体部破片にはSK 2407出土土器と直接接合するものを含む。

土師器　杯A・杯C・皿A・高杯・甕Aがある。高杯の脚部（29）は円筒形の脚柱部をヘラ削りで12角に面取りする。SK 2407出土例（6）に比べ、長脚化の傾向が明らかである。Ⅰ群土器。甕A（26）は体部外面を縦ハケメ、口縁部内面を横ハケメで調整した後、頸部と口縁部の内外面をヨコナデして仕上げる。体部内面には成形時の指頭による凹凸をそのまま残す。内方に巻き込む口縁端部は奈良時代後半に一般化する形態である。

須恵器　杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯F・杯L・鉢A・壷A・壷A蓋・甕類の体部破片がある。杯AⅢ（30）は底部外面ヘラキリのままで口縁部内外面に火襷がある。杯AⅣ（27・28）も底部外面ヘラキリのままで不調整。杯BⅢ（32）は底部外面ヘラキリのままで、底部と口縁部の屈曲部に断面逆台形の高台をつける。杯BⅢ蓋（31）は頂部上面をヘラ削りの後、ロクロナデで仕上げる。口縁部は断面S字状に屈曲する。31・32ともに奈良時代後半～末に一般化する新しい形態。杯F（33）は底部外面と口縁部下端をヘラ削りし、口縁端部にわずかに内方へ傾斜する面をもつ。器面はヨコナデ・仕上げナデにより極めて平滑に仕上げられている。杯L（25）は底部外面をヘラ削りし、丸底風の底部と口縁部の屈曲部よりかなり内方寄りに高台をつける。屈曲部より外反して立ちあがる口縁部は上端でさらに外反し、端部は丸くおさめる。この杯F・杯Lの特徴ある形態は金属容器である佐波理鋺、あるいは金銅鋺の形態を模倣して作られたものであり、いわゆる「鋺形」の須恵器に当る。ロクロはいずれも右回転である。

SK 2412 出土土器（fig. 11～14）

土壙SK 2412は調査区西南部に位置する平面不整形の浅い皿状の土壙である。調査区の遺構から出土した土器の約½量がこの土壙から出土している。SK 2412出土土器は土師器・須恵器ともに器種が豊富であり、墨書土器10点の他、三彩小壷1・土馬3点を含んでおり、奈良時代前半の平城京で使用された土器の実態をうかがえる好資料である。なお、SK 2412出土の須恵器横瓶に直接接合する破片が東北部の土壙SK 2410から出土しており、両者の埋没がほぼ同時期であったことが推測できる。

土師器　杯A・杯B・杯C・杯E・杯F・皿A・椀C・高杯・鉢B・壷B・甕A・甕Bがある。杯AⅠ（34～37）はいずれも底部外面をヘラ削りするb手法によるもの。内面にラセン文・放射状文をもつ。34は口縁部外面にヘラ磨きが認められる。35～37については、器面の風化のため不明。34・35はⅠ群土器、36・37はⅡ群土器。杯AⅡ（38）は b_0 手法で、暗文・口縁部外面のヘラ磨きはない。Ⅰ群土器。杯AⅡ（39～41）は内面にラセン文・放射状文をもつ。39はb手法、40・41は a_0 手法・a_1 手法による。木葉痕は認められない。39～41いずれもⅡ群土器。杯C（42～46）はいずれも底部外面不調整のa手法で、内面にラ

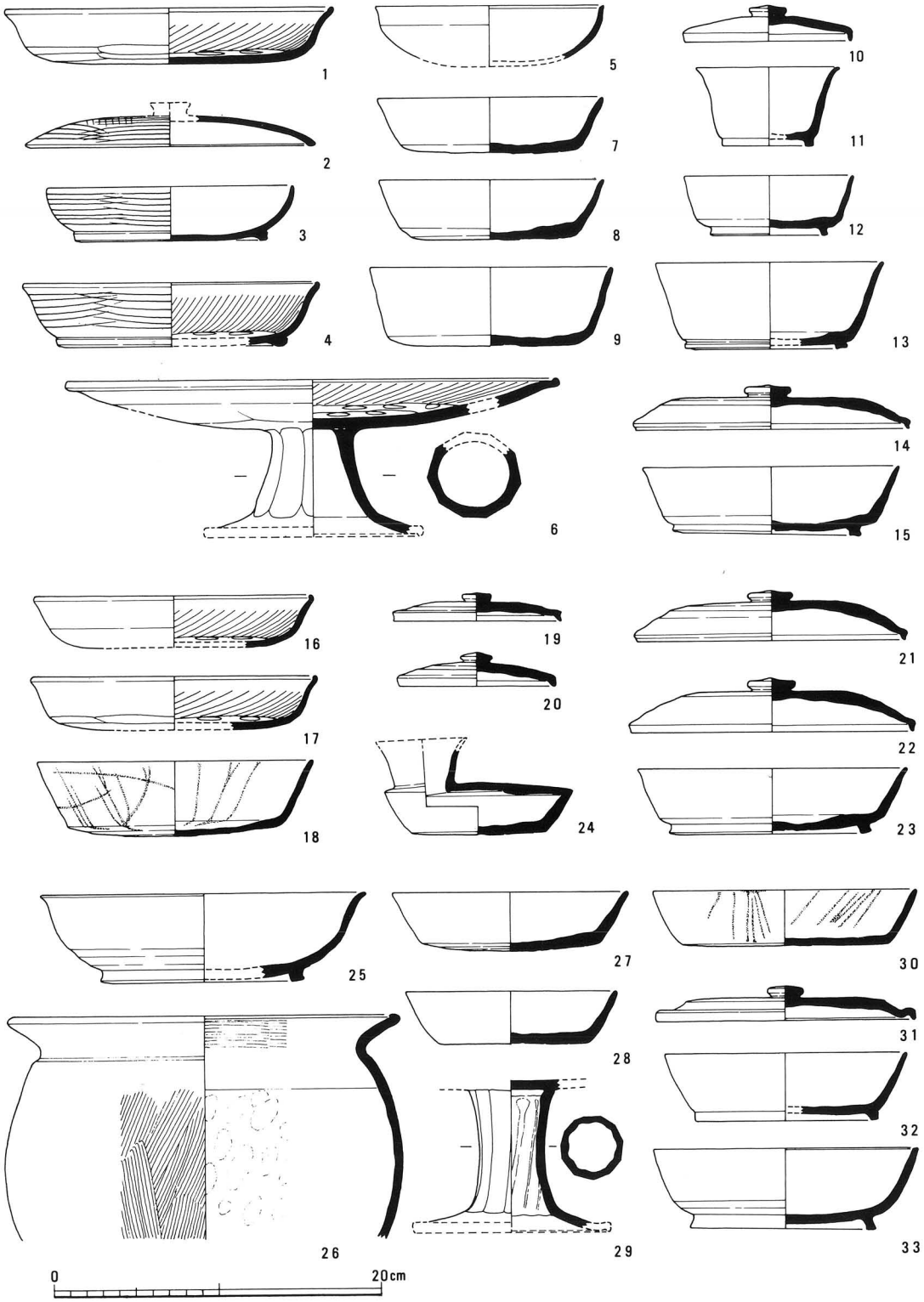


fig.10　SK2407・2408(1～15)、SD2401(16～24)、SK2406(25～33)出土土器実測図

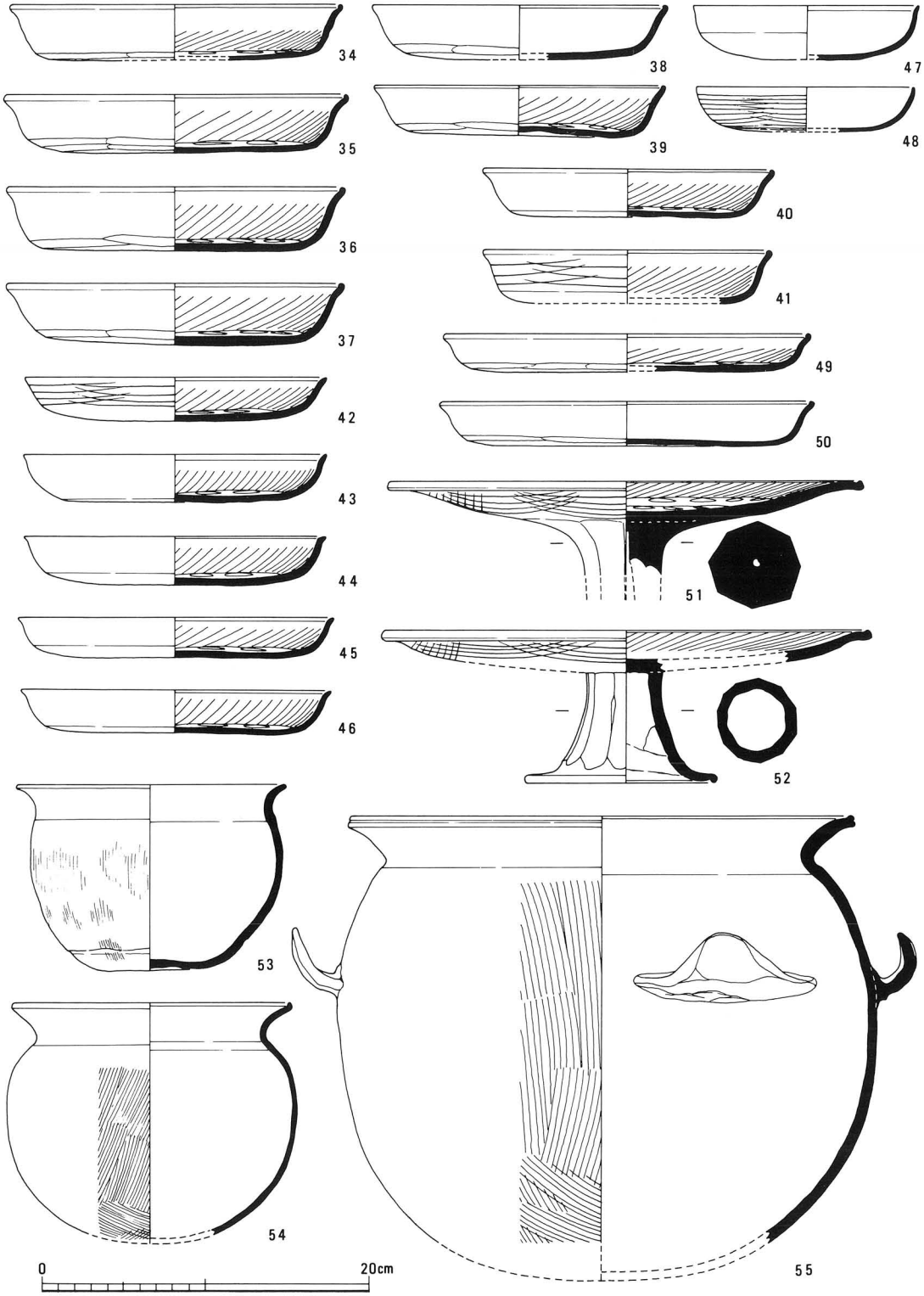


fig.11　SK2412出土土器実測図(1)

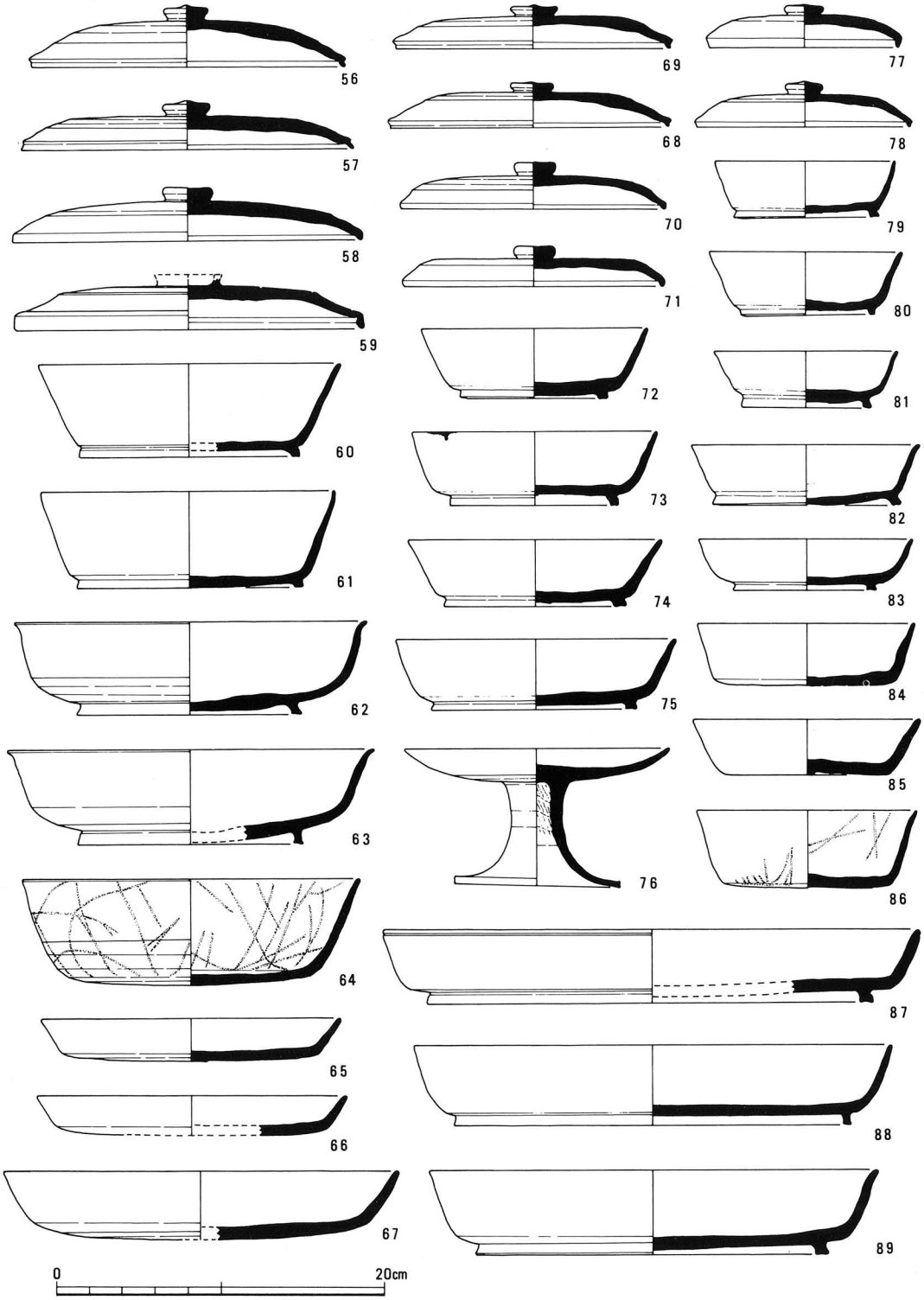


fig.12　SK2412出土土器実測図(2)

セン文・放射状文をもつ。42は口縁部外面をヘラ磨きする。44〜46は器面の風化で不明。42〜44はⅠ群土器、45・46はⅡ群土器。杯E（48）は底部外面をヘラ削りした後、底部外面と口縁部外面を密にヘラ磨きするb_3手法。内面はヨコナデで仕上げ、暗文はない。椀C（47）はa_0手法。杯F・椀CともにⅡ群土器である。ⅢAⅠ（49・50）はいずれもb_0手法によるもの。49は内面にラセン文・方射状文をもつ。50は暗文をもたない。49・50ともにⅠ群土器。高杯（51・52）は杯部下面を数回に分けてヘラ磨きし、上面にラセン文・放射状文をもつ。51は成形の際に、丸い棒状のものを心にして脚柱部を作り、外面を縦方向のヘラ削りで8角に面取りして仕上げている。52は逆位で、脚柱部上端から粘土紐を巻き上げて、円筒形の脚柱部と脚裾部を成形しており、内面に粘土紐の痕跡を残す。脚柱部外面は51と同じく縦方向のヘラ削りで12角に面取りして仕上げる。52はⅠ群土器、51はⅡ群土器。他にⅠ群土器の脚部が2個体分出土している。壷B（53）は体部外面を一旦縦ハケメで調整した後、内外面をナデによって平滑に整え、さらに口縁部内外面をヨコナデして仕上げる。体部下端に底部の成形に関係するとみられる環状のアタリ（凹み）が残る。恐らく型を利用して底部の最終成形（底部の外方への押出し）を行なった痕跡であろう。甕A（54）は体部外面を縦ハケメで調整し、内面は成形時の凹凸を残す。頸部・口縁部をヨコナデして仕上げる。口縁端部は端面が側方にあり、上端がわずかに突出する。同形態のものが他に4個体ある。いずれもⅠ群土器。甕B（55）も基本的な器形。製作技法は甕Aに共通するが、大形であり、体部側面に相対する2個の把手をもつ。同形態のものが他に3個体ある。いずれもⅠ群土器。

須恵器　杯A・杯B・杯L・ⅢA・ⅢB・ⅢC・高杯・鉢A・平鉢・鉢D・鉢X・盤A・壷A・壷A蓋・壷B・壷L・平瓶[2]・浄瓶・横瓶・甕A・甕B・甕Cがある。杯AⅠ（64）は底部外面と口縁部下半をヘラケズリし、口縁部内外面に火襷がある。杯AⅣ（84〜86）はいずれも底部外面ヘラキリのままで不調整。杯BⅡ（60・61・75）は器高6.0㎝前後の杯BⅡ−1（60・61）と器高4.0㎝前後の杯BⅡ−2（75）の2種があり、いずれも底部外面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅡ蓋（56・57・58）は頂部上面をヘラ削り・ロクロナデで仕上げ、偏平な宝珠形の鈕をつける。口縁部の屈曲はほとんどなく、端部は断面三角形で下方に突出する。57は「杯蓋硯」として使用。杯BⅢは9個体中73を含む2個体が底部外面をヘラ削りの後にロクロナデで仕上げ、74を含む他の7個体はヘラキリの後ナデて仕上げる。73は口縁部上端の3ケ所に煤が付着しており、燈火器として用いられたことがわかる。杯BⅣ（72・83）も底部外面をヘラキリ後、ナデて仕上げる。杯BⅣ（82）は灰褐色の特徴ある胎土をもち、底部外面の外周をヘラ削りし、中央部に糸切痕を残す。杯BⅤ（81）も底部外面中央に糸切痕を残す。胎土・調整の特徴は82に同じ。東海地方の窯の製品か。杯BⅢ蓋（69〜71）は頂部上面ヘラ削り・ロクロナデで仕上げる。杯BⅢ蓋（68）は頂部のヘラ削り調整を省略しヘラキリのままロクロナデして仕上げる。鈕や口縁端部のロクロ成形のシャープな68・69と丸みをもつ70・71との2群があり、それぞ

れ杯ＢⅡ蓋の56・57と58の形態上の特徴に一致する。恐らく生産地（窯）の違いを示すものであろう。69・70は「杯蓋硯」として使用されている。杯ＢＶ（79・80）は底部外面ヘラキリのまま不調整。杯ＢＶ蓋（77・78）は77が頂部外面ヘラキリ・ロクロナデ、78はヘラ削りの後、ロクロナデで仕上げる。杯Ｌ（62・63）は底部外面ヘラ削りで、内面はロクロナデと仕上げナデにより平滑に仕上げる。環状の鈕をもつ杯Ｆあるいは杯Ｌの蓋は２個体あり、59は頂部上面と口縁部上面に沈線による３重の圏線をもつ。他の１例は59とほぼ同一形態であるが、圏線をもたない。皿ＡＩ（67）は底部外面をヘラ削りして仕上げる。皿ＡⅡ（65・66）はいずれも底部外面ヘラキリのまま不調整。皿ＢＩ（87～89）は底部外面ヘラ削りで、底部内面はほぼ全面に及ぶ仕上げナデで平滑に仕上げる。他に、口縁端部にやや外方に傾斜する面をもつ皿ＣＩ１個体がある。底部外面はヘラキリのままで不調整。高杯（76）は器高8.4㎝、杯部の径16.2㎝の小形の高杯で、杯部下面中央部をヘラ削りして、

fig.13　SK2412出土食器セット（上段 土師器・下段 須恵器）

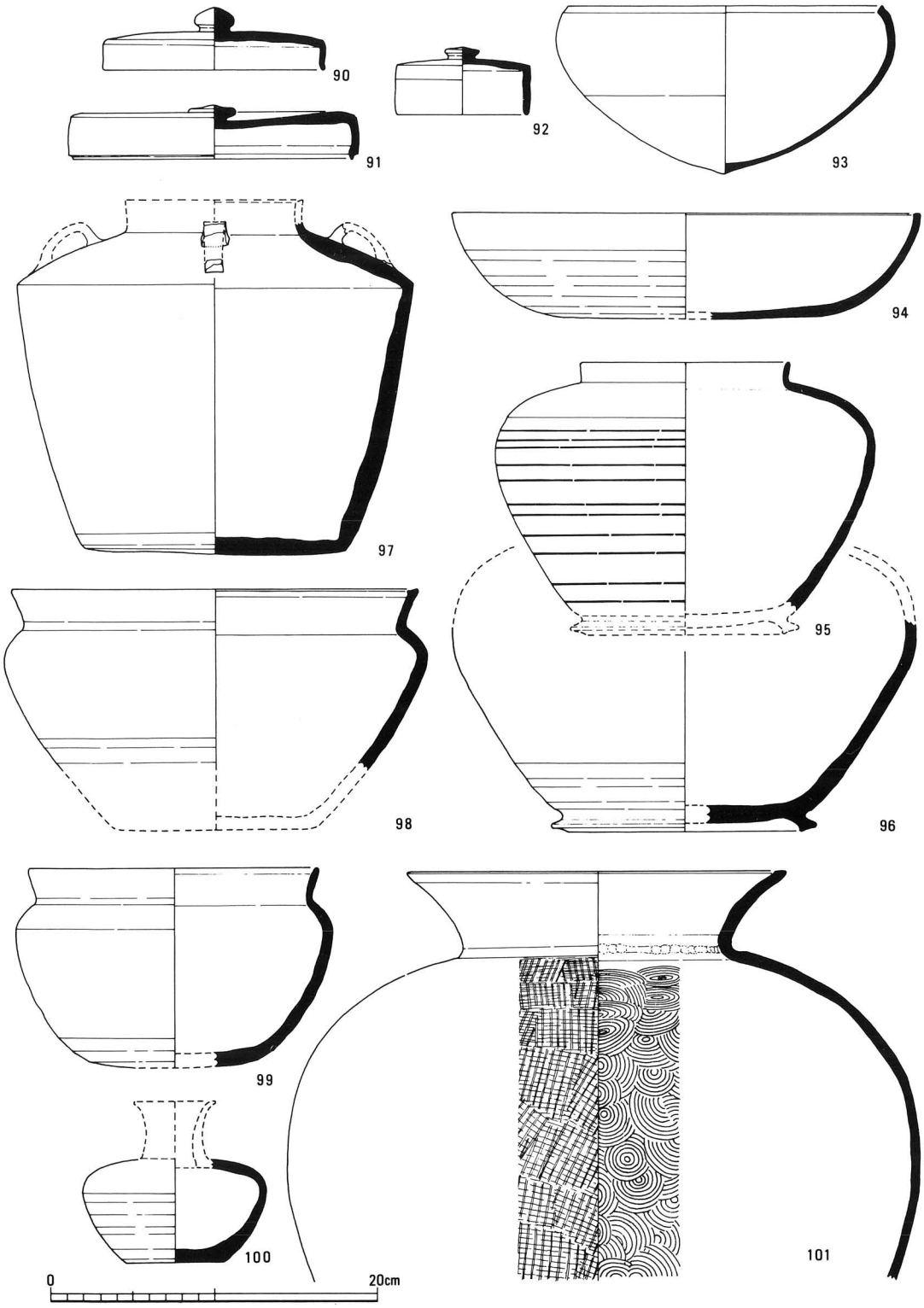


fig. 14　SK2412出土土器実測図(3)

脚部を接合する。脚柱部内面にはシボリ目が著しい。他に脚高10.0㎝、脚裾部の径14.8㎝、脚柱部の三方に長方形の透しをもつ大形の高杯の脚部片がある。鉢A（93）は尖底の鉄鉢形。底部外面をヘラ削り・ロクロナデで調整した後、内外面をコテあるいはヘラによって調整し、器面を平滑に仕上げる。平鉢（94）は土師器鉢Bに共通する形態で、平底からゆるく内反して立ちあがる口縁部と口縁端部の水平な面に特徴がある。底部外面と口縁部下半を丁寧にヘラ削りし、内面はロクロナデで平滑に仕上げる。鉢D（98）は体部外面下半をヘラ削りする。鉢X（99）は口径17.6㎝の小形の鉢で、底部外面をヘラ削りし、口縁端部は丸くおさめる。壷A（95・96）はいわゆる薬壷形。95は体部外面の肩部以下をヘラ削りの後、ロクロの回転を利用したヘラ磨きで調整して仕上げる。96は底部外面と体部外面下端をヘラ削りし、ヘラ磨きはない。壷B（97）はいわゆる四耳壷である。側面をヘラ削りで調整した半環状の把手4個を肩部上面にもつ。体部外面下端の狭い範囲をヘラ削りし、底部外面はナデて仕上げる。底部内面もナデて仕上げるが、不十分で、成形時の指頭による凹凸が残る。壷蓋（90〜92）は頂部をヘラ削りし、偏平な宝珠形の鈕をつける。91は焼成時の融着を防ぐために口縁端部を断面三角形にし、下方に突出させるが、90・92は口縁端部を丸くおさめる。壷L（100）は体部径11.2㎝の小形の細頸壷。底部外面と肩部以下の体部外面をヘラ削りで調整する。横瓶は図示しなかったが、体部は叩き成形の後、内外面をロクロナデで調整して内面の当板痕を消し、外反する短い口頸部をつける。このSK2412出土例に直接接合する破片が東北部の土壙SK2410で出土している。甕A（101）は体部を同心円当板・平行叩きで成形し、口縁端部に水平の面をもつ大きく外反する口縁部をもつ。体部最大径38.4㎝。体部下半の破片は全くみられない。他に肩部以下をほぼ完全に復原できる甕の体部1個体分があるが、口頸部を完全に欠失する。甕類では他に直立する短い口頸部をもつ甕Bの口縁部、広口・平底の甕Cの底部破片と、器種不明の甕類の体部破片が若干量ある。この甕類の体部破片には東北部の土壙SK2407出土品と直接接合する破片を含んでいる。

須恵器の製作に使用されたロクロの回転方向は、壷蓋(90)1例が左回転の他はいずれも右回転である。

SK2410出土土器（fig. 15・22）

土壙SK2410は掘立柱建物SB2393の南半に重複する位置にあり、建物に先行する浅い不整形の土壙である。出土土器の中には、土壙SK2412や東西溝SD2401の出土品と直接接合するものがあり、これらとほぼ同時期に埋没したものと推定できる。

土師器　杯A・杯B・蓋・杯C・皿A・甕A・甕Bと製塩土器がある。杯AⅡ（102）は不調整のa手法で、内面にラセン文・方射状文をもつ。杯AⅡ（103）はヘラ削りのb_0手法。内面にラセン文・方射状文をもつ。102・103ともにⅠ群土器。

須恵器　杯A・杯B・杯B蓋・杯L・皿Bと甕類の体部破片がある。杯AⅣ（104）は底部外面ヘラキリのまま不調整。杯BⅡ—1（105）は底部外面と口縁部下端をヘラ削り

して小さな高台をつける。杯BⅡ—2（114）・杯BⅢ（112・113）はいずれも底部外面ヘラキリのまま不調整。杯BⅢ蓋（110・111）は頂部上面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅣ—1（108）は底部外面と口縁部下端をヘラ削り調整。杯BⅣ—2（107）は底部外面ヘラ削り・ロクロナデ調整。杯BⅤ（109）は底部外面ヘラキリ後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅤ蓋（106）は頂部上面ヘラ削りの後、ロクロナデで仕上げる。皿BⅠ（115）は底部外面ヘラ削り。口縁端部内面に一条の沈線をもつ。土師器皿Bに共通する形態である。ロクロはいずれも右回転。

SK 2409 出土土器（fig. 16）

土壙SK 2409出土土器は、極く少量である。一部奈良時代後半〜末の特徴をもつものを含むが、大部分はSK 2412や他の土壙出土土器と同じ奈良時代前半に属すものである。

土師器　杯A・皿A・高杯・甕類の体部破片の他、黒色土器椀の底部破片がある。杯AⅠ（116）はC_1手法。皿AⅠ（117）はC_0手法。116・117ともに奈良時代後半〜末の土師器食器類の代表的形態・手法をもつ。いずれもⅡ群土器。

須恵器　杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・浄瓶・甕類の体部破片がある。皿AⅡ(118)は口縁部上端が大きく外反する土師器杯Cの模倣形態。法量も土師器杯Cに一致する。奈良時代前半に流行する形態である。底部外面はヘラキリの後、ナデて仕上げる。杯BⅠ—2（119）も奈良時代前半期を代表する古い形態。底部外面はヘラキリのままで高台をつける。杯BⅤ蓋（120）は頂部上面ヘラキリの後、ロクロナデで仕上げる。口縁端部の断面はS字形に屈曲、奈良時代後半期の特徴を良く示す。頂部下面を「杯蓋硯」として用いている。いずれもロクロは右回転。

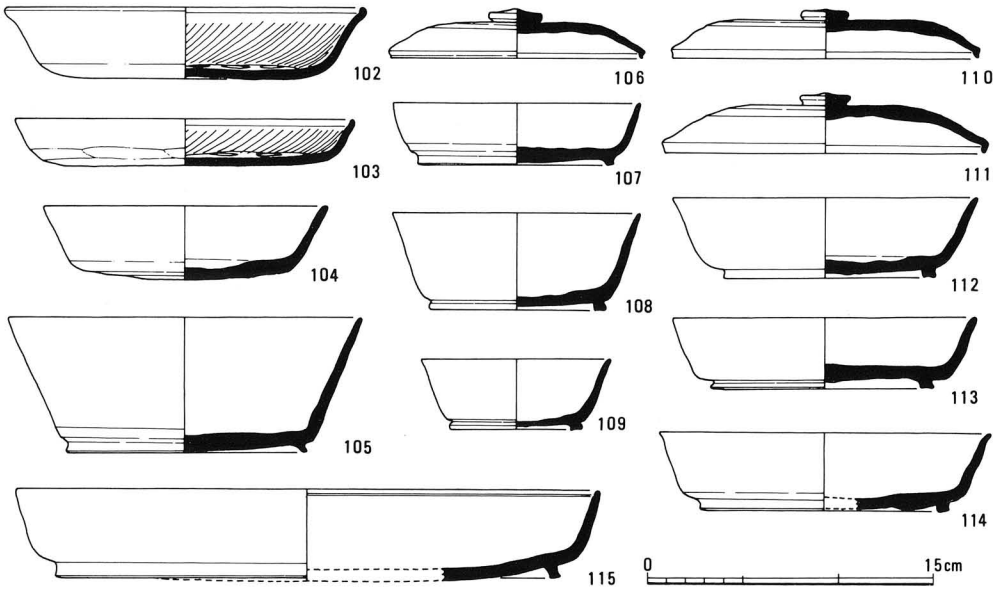


fig. 15　SK 2410出土土器実測図

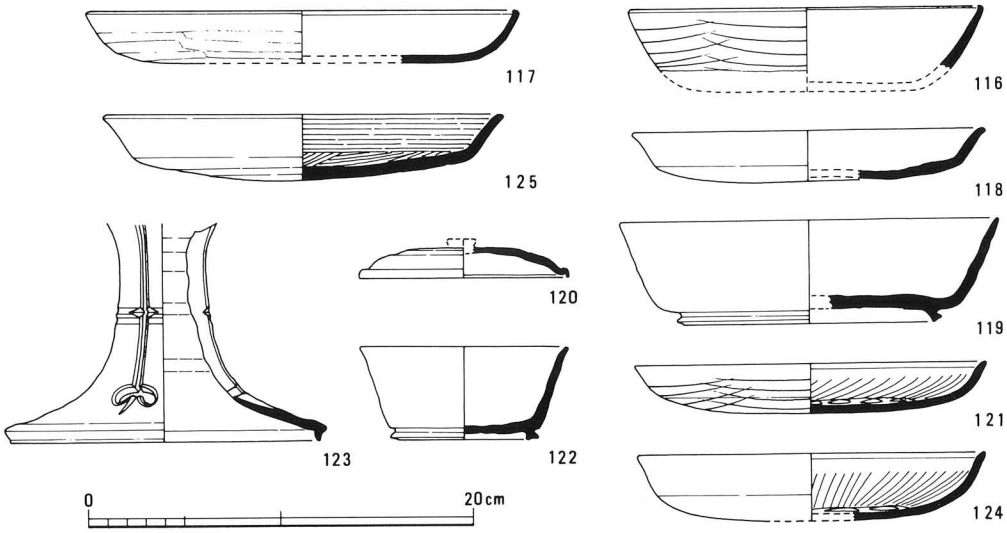


fig.16　SK2409(116～120)・SK2411(121～122)・SK2413(123)・SK2414(124)・包含層(125)出土土器実測図

SK 2411 出土土器（fig. 16）

土師器　　杯A・杯Cと甕類の体部破片がある。杯C（121）はa_3手法。内面にラセン文・放射状文をもつ。

須恵器　　杯A・杯B・杯B蓋・壷蓋・甕Aがある。杯BⅤ（122）は底部外面ヘラキリのまま。底部外面を硯として使用している。ロクロは右回転。

SK 2413 出土土器（fig. 16）

土壙SK 2413は掘立柱建物SB2395の西北隅柱掘形に重複する小土壙。須恵器高杯（123）は脚裾部の径16.0㎝の大形の高杯の脚部片である。脚部中位に2本の凹線文をめぐらし、脚柱部の三方に細い長方形の透しと、その下端に倒立した双葉形の透しをつくる。また、透し部分外側の角を削り落して面取りするとともに、双葉形の透しの中央下端と脚部中位の凹線文に重なる位置に、それぞれ細い逆三角形と横位の菱形の刻目を入れる、極めて手のこんだ装飾文をもつ。奈良時代の須恵器高杯としては他に例のないものである。

SK 2414 出土土器（fig. 16）

土壙SK 2412の北2mにある方形の土壙。出土土器は極くわずかである。土師器杯C（124）はa_0手法で、内面にラセン文・方射状文をもつ。

包含層出土土器（fig. 16）

須恵器皿A（125）は土壙SK2409出土の皿AⅡ（118）に共通する形態。法量は土師器杯AⅠに相当する。底部外面ヘラキリのまま不調整で底部内面を不定方向、口縁部内面を横方向のヘラ磨きで丁寧に研磨し、内面全体を黒色化する。灰褐色やや軟質であるが、胎土・成形技法・器形は一般の須恵器に共通する。須恵器をベースに作られた黒色土器として、特異なものである。

墨書土器（fig. 17・18, tab. 1）

土壙SK 2412を始めとする各遺構から総数15点の墨書土器が出土した。出土遺構・記載内容は別表に示すとおりである（tab. 1）。土器番号は実測図の番号に一致する。

	記載内容	器	種	記載位置	出土遺構	土器番号
1	北	土師器	杯A II	底部外面	SK 2412	40
2	宅	須恵器	杯A I	〃	〃	64
3	器	〃	杯A IV	〃	〃	84
4	十十	〃	杯B IV	〃	〃	72
5	一	〃	杯B III	〃	〃	73
6	大福	〃	杯B II 蓋	口縁部下面	〃	56
7	一	〃	〃	頂部上面	〃	58
8	器	〃	杯B V 蓋	〃	〃	78
9	（符牒）	〃	〃	〃	〃	77
10	□□	〃	杯L	底部外面	〃	62
11	十（カ）	土師器	杯C	〃	SK 2411	121
12	尹	須恵器	杯	〃	SK 2406	
13	□□	〃	杯B 蓋	口縁部内面	SK 2407	
14	□	〃	杯	底部外面	SB 2390	
15	□□	〃	杯A IV	〃	SD 2401	

fig.17　墨書土器

tab.1　墨書土器一覧

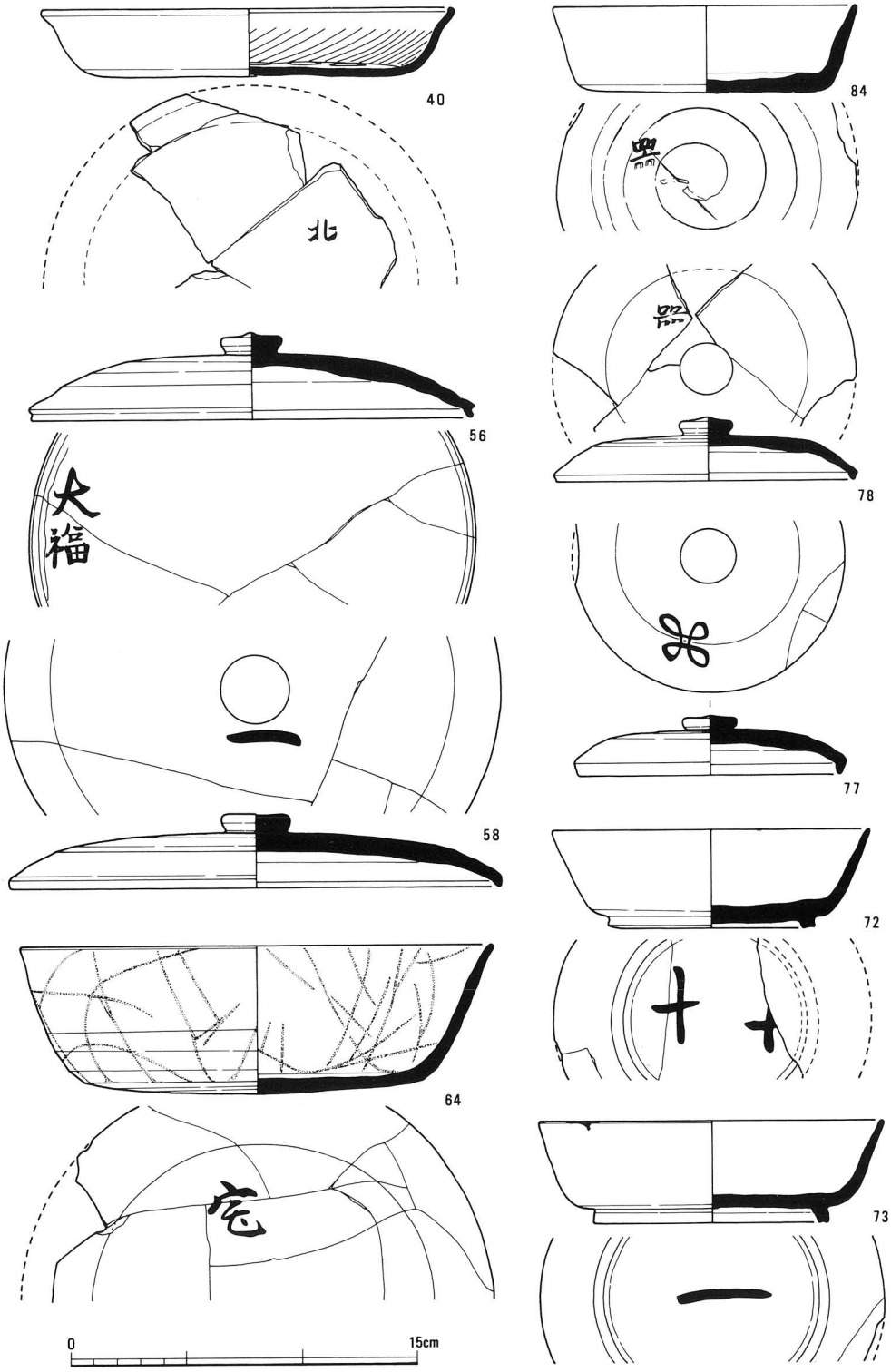


fig.18　墨書土器実測図

鉛釉陶器（fig. 19）

土壙SK 2412から三彩小壷の底部破片が、またSK 2412西南方の包含層より二彩皿もしくは椀の底部の小破片が出土した。三彩小壷は高台径4.3㎝の薬壷形に復原できる。胎土は卵色・軟質で、体部外面は外周を12等分して、6区に緑釉をかけ、残り6区を交互に白釉・褐釉で埋める。緑釉・褐釉は高台側面まで流下している。高台と底部外面及び内面は白釉。内面の白釉には貫入が著しい。底部外面に径2.4㎝の窯道具の痕跡が残る。二彩片は1.5×3.0㎝の小破片で、上面白釉、下面は緑白二彩釉をかける。

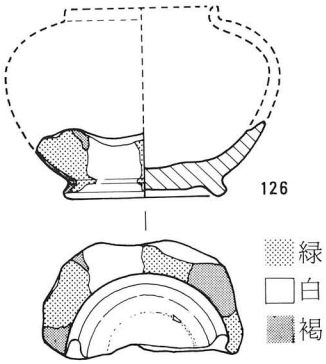


fig. 19　三彩小壷実測図

ミニチュア土器（fig. 20）

掘立柱建物SB 2393の南端、土壙SK 2410の掘形直上の包含層より2個の手づくね土器が出土した。出土位置・層位から本来SK 2410出土土器と一体のものであった可能性がある。その1（127）は径2.3㎝、器高1.2㎝の小形・上げ底の杯形土器。他の1点（128）は器高5.5㎝、杯部の径8.5㎝の小形の高杯である。脚部は手づくね。杯部は粘土紐巻き上げ成形で杯部下面に粘土紐の痕跡を残す。

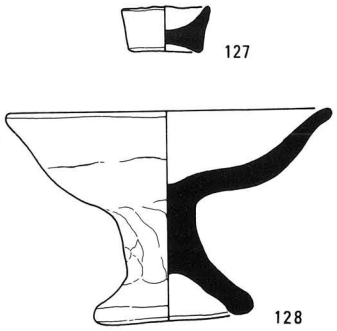


fig. 20　ミニチュア土器実測図

土馬（fig. 21）

土壙SK 2412から頭部破片2・体部破片3・尾部破片1が出土した。胎土・色調の特徴から土馬3個体の破片と推定される。破片から以下のように土馬の成形法が復原できる。まず粘土塊を棒状にのばして胴部〜尾部を作り、別に成形した前肢・後肢を接合する。次に棒状の粘土を曲げて頸部・頭部の原型を作り、下端を胴部前端にかぶせ接合する。頸部上縁をつまみ出してタテガミを作る。頭部側面に粘土紐の手綱をつけるとともに、粘土板

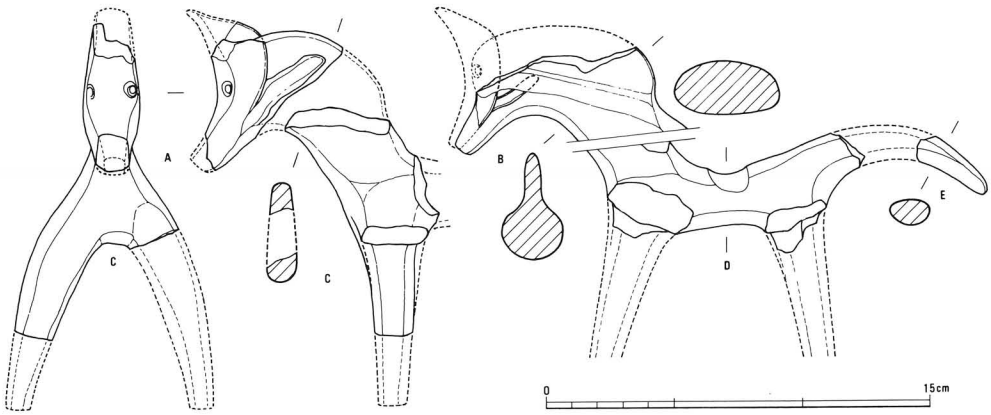


fig. 21　土馬実測図

を折り曲げて頭部にかぶせて顔面をつくり、竹管で目を表現する。胴上部を凹めて鞍を表現する。明瞭なタテガミの表現と下方へ垂れた尾、手綱、鞍の表現は奈良時代前半期の土馬の特徴を良く示すものである。この三体の土馬は前出の三彩小壷などとともに雨乞いなどの何らかの祭祀に用いられた後、他の土器破片とともに土壙に投棄されたものであろう。

fig.22　各遺構出土土器（最上段SK2407・2408、中段上SD2401、中段下SK2406、最下段SK2410）

羊形硯（fig. 23・巻頭写真）

須恵器杯蓋の内面や須恵器杯Ｂの底部外面を硯として利用したものについては既にふれたが（14・57・69・70・ 120 ・ 122 ）、調査区ではこれらの転用硯の他に、掘立柱建物ＳＢ2393の南妻柱列東第２柱穴の掘形から、羊形硯の破片とみられるものが出土している。

出土した頭～胸部破片は、左右とも基部と先端を除く角の大部分を失っているが、復原される角の形態と両頬にみられる顔毛、胸部にみられる波状の体毛の表現から、羊を形どったものと推定される。肩部上面に筆の穂先をそろえる際についたとみられる墨痕がある

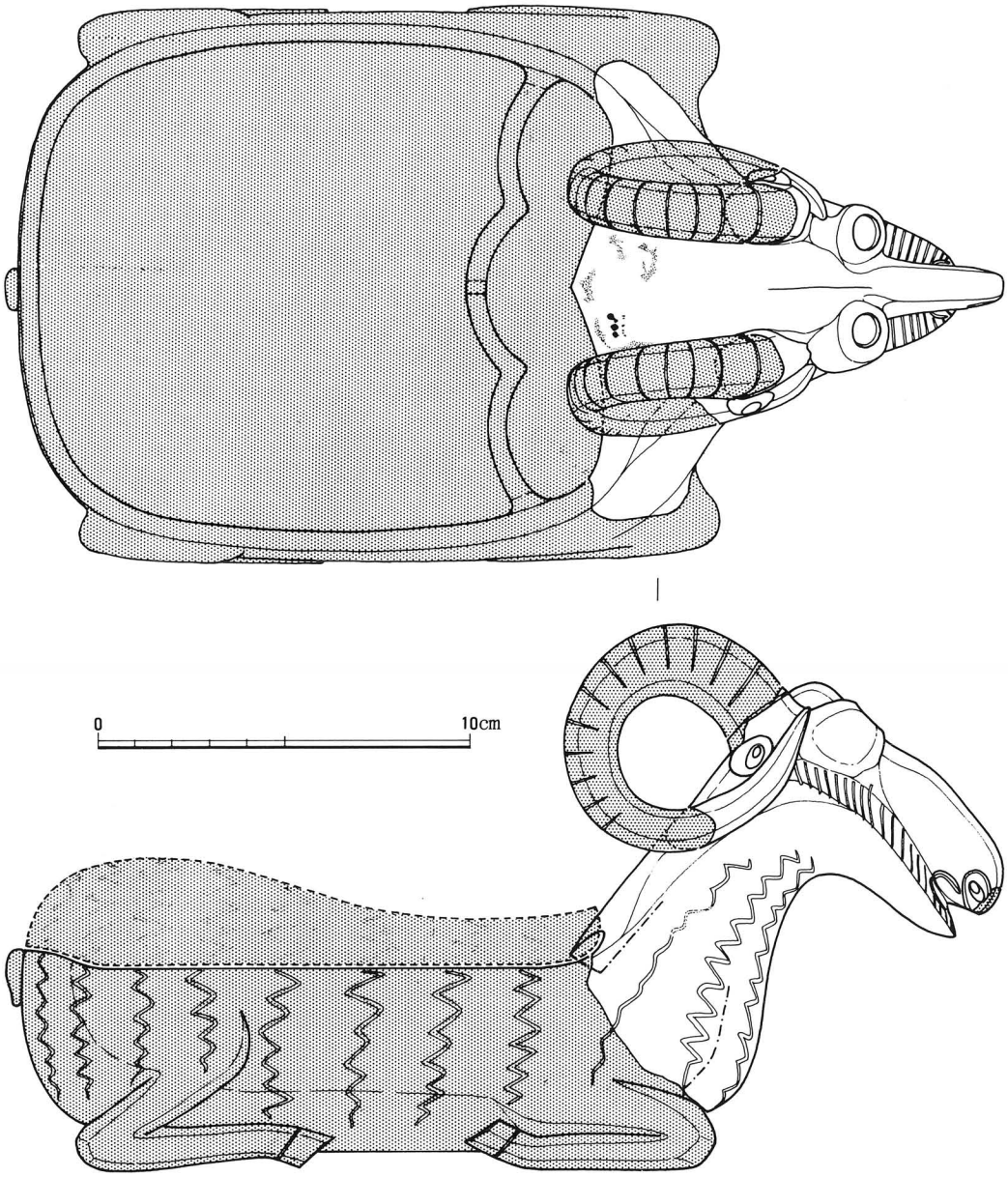


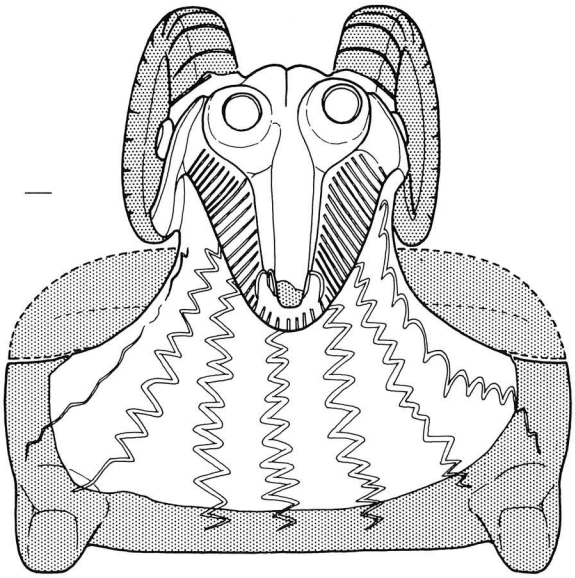
fig.23　羊形硯実測図（アミ部分は復原）

こと、またこの部分の形態が従来知られている形象硯の造形に一致することから羊形形象硯の一部と判断した。胎土・焼成は青灰色やや軟質の須恵質。胸部・肩部は厚さ1.0㎝前後で内部は空洞であり、頭部は充実している。胸部から下顎部と肩部〜頭・上顎部の二枚の粘土板を上下に接合して成形したものと推定される。これに半球状に突出した眼と別途成形した角・耳を接合して羊の基本型を作り、竹管で眼球を、ヘラ押しと刺突により鼻・口・耳孔を表わし、また鋭いヘラ描き沈線で顔毛と角紋、浅いヘラ描き波状文で体毛を描いて仕上げる。頭部〜肩部は無文。図及び写真は、平城京左京八条三坊（東市東北地域）出土の前肢を折りたたんで休息する獣形硯の胸部〜前肢部破片、あるいは隋・唐の明器にみられる羊の造形を参考に原形を復原したものである。

羊形硯の埋没時期については、羊形硯を出土したSB2393柱穴の出土土器が、いずれもSB2393に重複する土壙SK2410出土土器と同時期のものであることから、SK2410に他の土器類とともに投棄され、偶然建物SB2393の柱掘形にまぎれ込んだとする見方と、建物SB2393の造営に際し、その柱掘形に意識的に投入したとする見方があり、その時期を限定することができない。前者であれば奈良時代前半、後者であれば奈良時代中頃ということになる。いずれにしても、奈良〜平安時代のわが国における羊の造形として唯一の例であり、また獣形形象硯[(3)]の獣形を確認できる初めての例としても重要な資料である。

まとめ

整理の結果、調査区内の各所で検出された土壙SK2407・2408・2410・2412・及び溝SD2401の出土土器は、その中に互に接合する同一個体の破片を含み、溝SD2401の埋没と同時期に相次いで廃棄・埋没したことが明らかになった。土壙SK2412出土土器に代表されるこれら一群の土器の編年的位置については、土師器食器類の器種構成と法量、特に



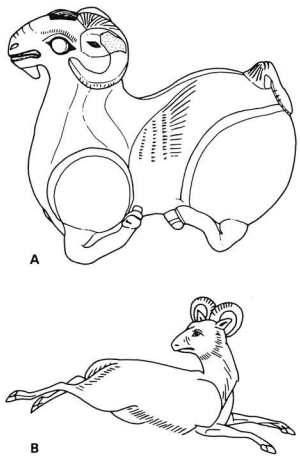


fig.24　羊形参考資料
A南京象山王氏墓群出土
青磁羊形器（4世紀）
B正倉院銀壷羊文（8世紀）

平城宮Ⅲに出現する新しい器種である土師器椀Ａを全く含まないこと、須恵器杯Ｂ類の形態的特徴すなわち高台位置・形態、及び杯Ｂ蓋に平城宮Ⅲ以降顕著になる口縁部の屈曲がほとんどみられないことなどから、平城宮Ⅱの新しい段階に位置づけることができよう。実年代としてほぼ天平年間（729～749）中頃の土器ということになる。

土壙SK 2412 出土土器を例として、その内容をみると（tab. 3）、土師器と須恵器の個体数比は45：55の割合であり、平城宮Ⅱ及びⅢの標式遺構である平城京左京一条三坊の溝SD 485・平城宮内裏北外郭の土壙SK 820 出土土器の例に比べかなり須恵器の量が多い。また土師器・須恵器の食器類が占める割合は71％であり、平城宮造営前の集落の土器である下ツ道西側溝SD 1900 出土土器やSD 485 出土土器の例に近似し、SK 820 出土土器、他の宮の土器に比べて食器の占める割合がかなり低い。これは別表（tab. 2）にも明らかなように、宮において特に土師器食器類が多用されたことによるものである。

食器類の器種構成をみると、口径 15.0cm・器高 2.7 cm前後の土師器杯ＡⅢがなく、かわってほぼ同法量の須恵器杯ＢⅢが多用されていること、器高 5 cmを越える「椀」に相当する深い器形の土師器がなく、口径18～22cm・器高 6 cm前後の須恵器杯ＡⅠ・ＢⅡ－１・Ｌがその用に充てられていることが指摘できる。また土師器・須恵器の食器の間には、土師器杯Ｃと須恵器皿ＡⅡ、土師器椀Ｃと須恵器杯ＡⅣ、あるいは土師器皿ＡⅠと須恵器皿ＡⅠ・ＣⅠなどのように、ほぼ同形態・同法量の食器があり、これらが互にその用途を兼ねるものであったことは明らかである。これらの食器数種を組み合せて食膳が構成されるわけであるが、巻末写真にその一例を示して天平の時代の食膳をしのぶこととした。

土壙SK 2412 他の出土土器の内容を「宮の土器」と「京の土器」という比較の視点でみると、食器の占める割合の他にもいくつかの興味ある問題点を指摘することができる。まず第１は既に述べた食器類の器種構成にみられる特質であり、土師器食器類においては口径15cm以下の小形の食器（杯ＡⅢ・椀Ｃ・皿Ｃなど）がほとんどみられないこと、また逆に器高 5 cmを越える深い器形の大形食器が全くみられないことが指摘できる。一方須恵器においても口径18～20cm・器高 5 cmを越える大形の食器はごくわずかである。こうした器種構成の特徴は、様々な身分を含む多人数の饗応を背景とする宮の土器に対して、日常の食生活の内容に対応して購入され、使用される京の土器の特性の一端を示すものであろう。第２に、須恵器食器類の中に、同時期の宮の土器にみられない特殊な製品を含んでいることが指摘できる。その１は鋺形の須恵器杯Ｌの存在である。平城宮における現在までの調査で出土した大量の須恵器の中でも杯Ｌは極めて出土例の限られたものであるが、今回の調査区では土壙SK 2412 他の出土土器に一般的にみられる。その２は、東海地方の製品とみられる糸切底の杯Ｂ（81・82）の存在である。これもまた同時期の宮内出土土器には全くみられないものである。こうした宮の土器には一般にみられない杯Ｌの盛行や、遠隔の生産地の製品の存在は、平城京における土器の流通という大きな課題に対して、一つの手懸りを与えるものであろう。

遺構	用　途	土師器(%)	須恵器(%)	計（%）
SD 1900	食器	85（27）	112（35）	197（62）
	貯蔵器	12（4）	26（8）	38（12）
（集落）	煮炊具	84（26）	0	84（26）
	計%	181（57）	138（43）	319（100）
SD 485	食器	398（39）	271（27）	669（66）
	貯蔵器	23（3）	104（10）	127（13）
（京）	煮炊具	213（21）	0	213（21）
	計%	634（63）	375（37）	1009（100）
SK 2412	食器	33（33）	38（38）	71（71）
	貯蔵器	3（3）	17（17）	20（20）
（京）	煮炊具	9（9）	0	9（9）
	計%	45（45）	55（55）	100（100）
SK 820	食器	409（65）	175（28）	584（93）
	貯蔵器	8（2）	14（2）	22（4）
（宮）	煮炊具	20（3）	0	20（3）
	計%	437（70）	189（30）	626（100）

tab. 2　出土土器の構成一覧

註

1. 平城宮Ⅰ群土器・Ⅱ群土器については『平城宮発掘調査報告Ⅶ・Ⅸ・Ⅺ』を参照。
2. 平鉢一土師器鉢Bに共通する形態（新名称）。
3. 前出、平城京左京八条三坊（東市東北地域）の他、平城京左京五条二坊十四坪でも獣形硯の破片が出土している（『奈良市埋蔵文化財調査報告書一昭和54年度』、1980）。

平城宮土器編年（『平城宮発掘調査報告Ⅶ』1978にもとずく）

	主要遺構	略年代	年代推定の根拠	
平城宮Ⅰ	SD1900	710	木簡	701～710年
〃　Ⅱ	SK2102	730	〃	728～729年
〃　Ⅲ	SK2101	750	〃	746・750年
〃　Ⅳ	SK 219	765	〃	762年
〃　Ⅴ	SK2113	780	〃	758年以降

土師器			Ⅰ群	Ⅱ群	その他	計	%
杯	A	Ⅰ	3	3		6 } 10	33
		Ⅱ	1	3		4	
	B			1		1	
	C		4	5		9	
	E			1		1	
	F			1		1	
皿	A Ⅰ		2	2		4	
椀	C		1	1		2	
高杯			3	1		4	
鉢	B		1			1	12
壺	D				3	3	
甕	A		5			5	
	B		4			4	
小計			24	18	3	45	**45**

須恵器			Ⅰ群	Ⅱ群	その他	計	%
杯	A	Ⅰ	1			1 } 4	38
		Ⅳ	3			3	
	B	Ⅱ	4			4 } 21	
		Ⅲ	9			9	
		Ⅳ	3		1	4	
		Ⅴ	3		1	4	
	L		2			2	
皿	A	Ⅰ	1			1	
		Ⅱ	2			2	
	B	Ⅰ	3			3	
	C	Ⅰ	1			1	
高杯			2			2	
平鉢			1			1	
鉢	A			1		1	17
	D		1			1	
	X		1			1	
盤	A		1			1	
壺	A		4			4	
	B		2			2	
	L		1			1	
浄瓶			1			1	
平瓶			1			1	
横瓶			1			1	
甕	A		2			2	
	B		1			1	
	C		1			1	
小計			52	1	2	55	**55**
三彩小壺				1		1	
総計						101	100

tab. 3　SK 2412 出土土器個体数表

測定可能なものの個体数を示す。杯B・壺類の蓋は個体数に含まない。

2. 屋　瓦（fig. 25）

軒丸瓦２点、軒平瓦１点が出土した。ほかに丸・平瓦の破片が若干ある。

軒丸瓦は6308型式および6311Ｃ型式と呼ばれるもので[1]、両者とも遺物包含層から発見されており、遺構に伴ったものではない。6308型式は複弁８弁蓮華紋の周囲に凸線鋸歯紋と珠紋をめぐらせる。蓮弁の線は繊細、やや立体感に欠けるが、均整のとれた形である。Ａ～Ｄ、Ｆ～Ｊ、Ｌ・Ｎの11種に細分されるが、本例は中房を欠いた破片のため種別まではわからない。6311型式も6308型式によく似た複弁８弁蓮華紋軒丸瓦である。中房が弁区より一段低い点などによって6308型式と区別される。Ａ～Ｄの４種があり、本例はＣ種に属する。Ｃは蓮弁の外周をめぐる珠紋と線鋸歯紋の数がどちらも16で、他種に比べて少ない。Ａ・Ｂ両種は平城宮内裏地区から多量に出土し、「内裏型式」と呼ばれるが、Ｃ種は出土量も少なく特定の地区とは結びつかない。

軒平瓦は6721型式に属する。これは５回反転均整唐草紋の周囲に珠紋帯がめぐるもので、Ａ、Ｃ～Ｋの10種に細分される。SA2405の柱掘形の一つから出土。左端部近くの細片のため種別は判断し難い。

出土した３点の軒瓦はいずれも「平城宮式」として通有のものである。平城京内の諸遺跡においては、平城宮式の軒瓦が大半を占めるばあいと、平城宮式とは異なる京特有の軒瓦が多く出土するばあいとがある。前者の例は極めて少なく、宮と密接な関係のある官衙や離宮のような遺構と考えられている[2]。今回の左京四条四坊九坪のばあい、出土したすべての軒瓦が平城宮式であるとはいえ、あまりにも点数が少なく、どちらのケースとも断定することはできない。

1. 型式番号は奈良国立文化財研究所が設定したもので、番号のつけ方等詳細については同研究所『基準資料Ⅰ瓦編１』(1973年)の解説を参照されたい。
2. 平城宮式軒瓦が大半を占めた例としては平城京左京三条二坊六坪、同五条二坊十四坪が知られている。京特有の軒瓦が多い場合は多数あるが、左京三条二坊十五坪が典型的な例として掲げられる。

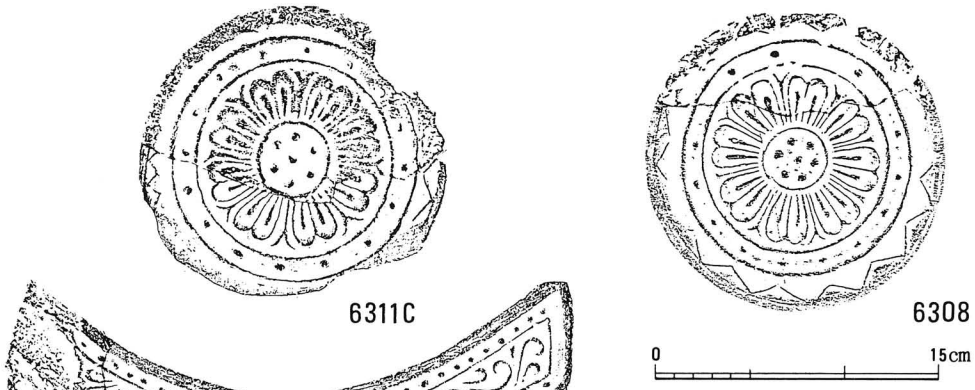


fig. 25　出土軒瓦拓本
（6308型式と6721型式は細分型式不明のため、6308Ａ・6721Ｆ型式で復原した）

3. 銭　貨（fig. 26・27）

SK 2408出土銭（fig. 27）　長方形土壙SK 2408から100枚近い銭が一括出土した。fig. 27にみるように、銭の穴に紐を通した差銭（さしぜに）の状態をよく留めている。出土遺構SK 2408は調査区東北隅にあり、東西溝SD 2401、土壙SK 2407と重複する長辺2.2 m、短辺0.7 m、深さ0.65 mの長方形土壙である。銭は土壙中央南よりの埋土中位から出土した。銹化が進み相互の銹着が著しいため、出土状態のまま取り上げて、次節に述べるような保存処理を行なった。現状における肉眼観察では92枚が確認できるが、X線の透過により新たに3枚＋αが確認され、発見時に遊離した2枚を加えると総数は97枚を越える。銭文を確認できる6枚の銭は、いずれも隷開の和同開珎である。伴出土器の年代から他種銭を含む可能性はうすく、和同開珎100枚を一本とする差銭を埋納したものと考えられる。

SB 2390出土銭（fig. 26）　掘立柱建物SB 2390の身舎東北隅の柱穴から、和同開珎が一枚出土した。やはり隷開和同で、銹化が進行し銭文の一部を欠損する。SB 2390は今回検出した最大の建物で、身舎東北隅の柱穴には柱痕跡の周囲に根固め状の施設が認められる。銭はこの施設の下、柱掘形の底面に近い埋土中から出土した。建物の造営に際して埋納された地鎮具とみられるものである。京内にも二・三の類例がある。

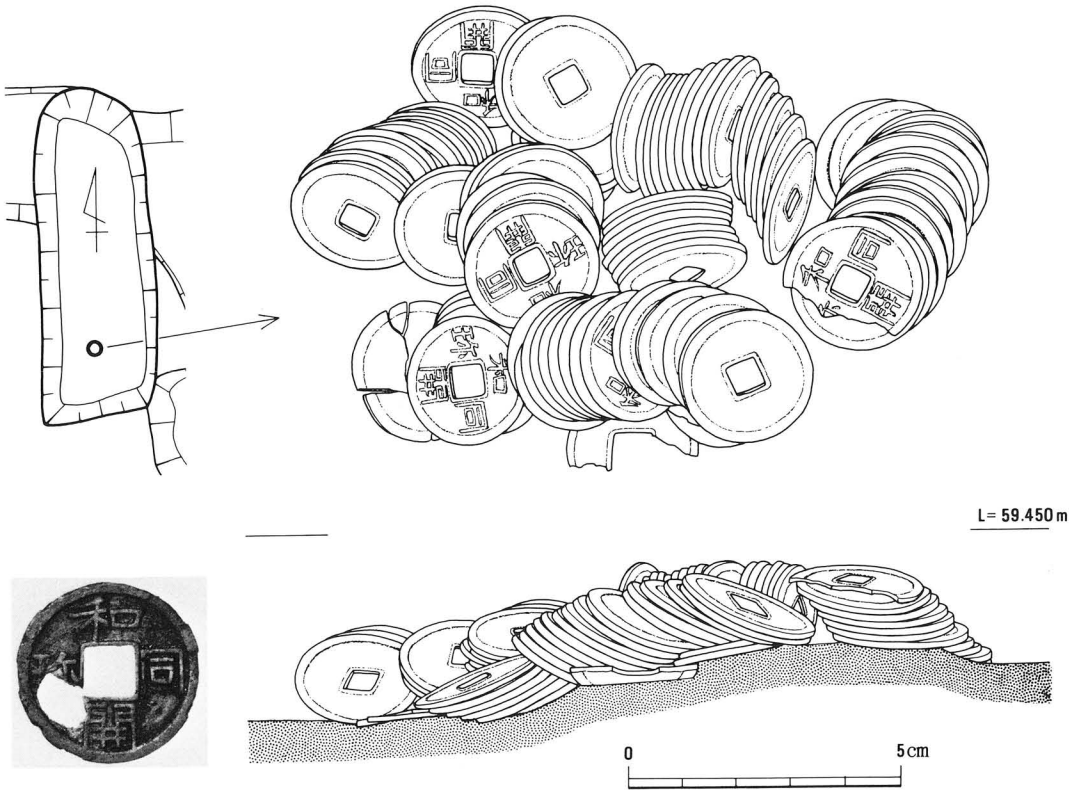


fig. 26　SB 2390出土銭

fig. 27　銅銭出土状態実測図（SK 2408）

4. 採取遺物・遺構の保存

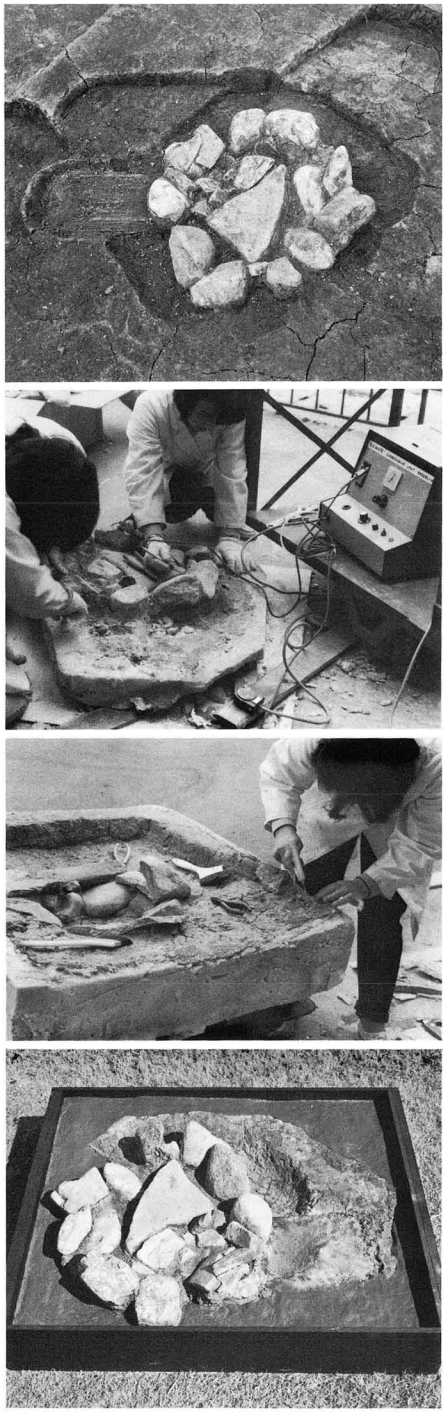


fig.28 柱穴根巻石の保存処置

柱穴根巻石の移設保存（fig. 28） 根巻石や礎板が残存する柱穴を取り上げ、博物館などで展示ができるように保存処置を行なった。取り上げた遺構の柱穴は、SB2390 の北側柱列のうち2箇所で、75×93、85× 104 ㎝の範囲である。

まず、それらの周辺の土壌を削除し、偏平な直方体の形状に切り出す。柱穴の表面には、湿った不織布（ポリエステル製で和紙ようの柔軟性のある布）を張り付け、湿拓をとる要領で遺構表面によく密着するようにする。不織布は取り上げの際、梱包・保護のために使用するウレタンフォームが遺構面に直接付着しないようにするものである。ウレタンフォームの原液は、イソシアネート成分とポリオール成分とから成る。これらを等量混合撹拌すると発泡を開始し、数分後には発泡スチロール状のウレタンフォームが形成される。したがって、現場でも容易に取り扱うことができ、しかも、発泡体の密度が0.03（体積 100 ㎤の重量が3 ㌘に相当）ときわめて軽量であり、こうした遺構取り上げの梱包保護材料としては最適といえる。従来、石膏やコンクリートが利用された例はあるが、堅固であるために、移設したあとの梱包解除が困難となる。一方、ウレタンフォームの場合には材質が発泡スチロール状のものであり、梱包解除は容易である。なお、コンクリートと同等の強度は持たないが、あらかじめ、遺構部分を鋼材などで枠組みしたり、部分的にモルタルや合成樹脂などを注入して強化すれば、古墳や窯跡などの大型の遺構でもウレタンフォームを利用して取り上げることが可能である。

ウレタンフォームで梱包した遺構は室内に搬入し、裏面の土壌にはイソシアネート系合成樹

脂をしみこませて硬化した。さらに、エポキシ系接着剤を用いてガラス繊維を張り重ね、裏打ちをする。こうして強化した遺構を事前に準備した木製の箱に納め、ウレタンフォームを利用して固定した。すなわち、ウレタンフォームは、どのような形状の狭隘な空間をも充塡することが可能なので、特に、底部や周囲の隙間を充塡することができる。木箱に納められた遺構の根巻石を相互に固定したあと、土壌部分にはイソシアネート系合成樹脂を浸透させて硬化した。なお、礎板については、別途、ポリエチレングリコール（ワックスようの高分子物質）を含浸させて硬化し、原位置にもどすことにした。

和同開珎の保存処理（fig. 29）　長方形土壙SK 2408出土の銭貨の大半は完形を保っていたが、保存状態は良好でなく、錆化して互に固着しているので、個々を取り上げることはせず、出土状態のまま観察できるように周囲の土壌ごと切り取って保存処理した。

土壌には大量の水分が含まれており、自然に乾燥させるとひび割れが発生し、また、サビの進行も危惧される。土壌にエチルアルコールを散布しながら徐々に乾燥させる方法を繰り返した。十分に乾燥したあと、アクリル系合成樹脂を含浸して強化した。銭貨には、アクリル系合成樹脂に3％程度のベンゾトリアゾールを混合した樹脂溶液を塗布・含浸して、銭貨のサビの進行を防ぎ、同時に銭貨自体の強化をはかった。ベンゾトリアゾールは、サビに含まれる塩化物と銅を固定し、腐食の進行を抑制する作用をもっている。硬化された銭貨は塩化ビニール製の箱（縦15×横18.5×高さ5㎝）に納めて仕上げとした。

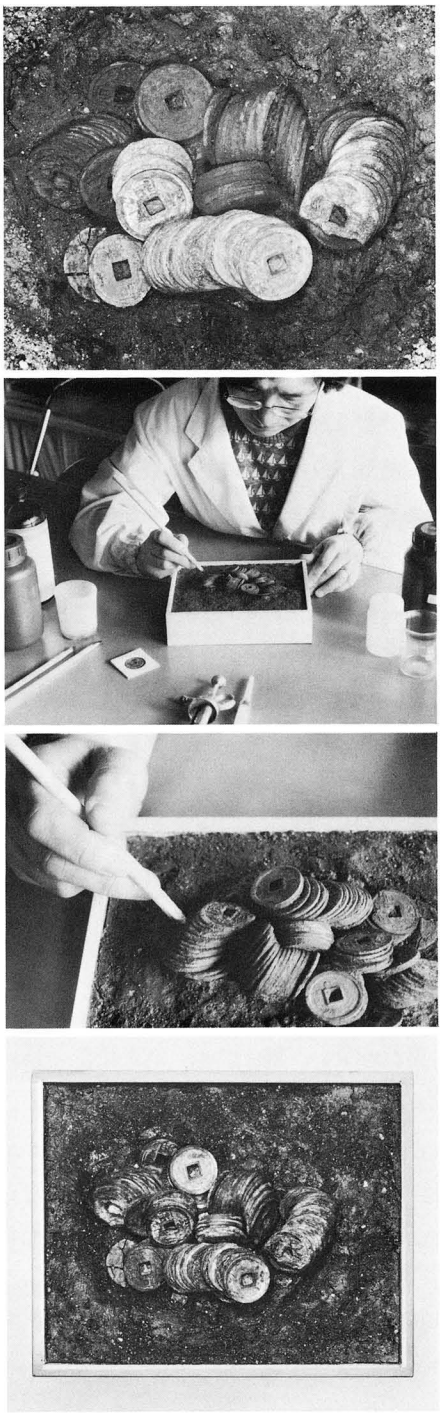


fig. 29　和同開珎の保存処理

Ⅳ まとめ

1. 東四坊々間路

平城京の条坊遺構に関する調査成果は、今回検出の遺構を含め、現時点で50数件を数える。しかし調査面積などの制約から、条坊計画の道路の両側溝を確認した例は少なく、正確な道路心を知りうるものは多くない。多くの場合は道路片側の側溝の部分的な検出にとどまり、従来の成果をもとに道路幅員、側溝幅を推測して判断する方法を採っており、遺構の残存状況を含め正確な数値を得難い状況にある。したがって、今後数多くの調査資料の蓄積が必要となるわけであるが、今回の調査では、東四坊々間路の両側溝を初めて検出し、条坊計画の解明に貴重な資料を提供することになった。

さて、今回調査区の西端において検出したSF 2400 は、平城京左京四条四坊の中央を南北に走り、九坪の西を限る東四坊々間路に相当する。東西両側溝心を遺構実測平面・断面図より求めると、両側溝心々距離は 9.0 mとなり、両側溝心の中心を道路心と決めると、四坊々間路心として下記の座標値を得る。四坊々間路心から、平城宮第16次調査で確認した朱雀門心までの東西方向の距離を求めると、国土方眼方位で 1860.82 mとなる。この値を朱雀大路[(1)]で確認している条坊方位の振れ(N O°15′41″W) で修正すると実長距離1856.56 mが得られる。ところで朱雀大路と四坊々間路の計画寸法は、6300尺 (3.5 坊分) であり、換算値を計画寸法で除すことにより造営の基準尺0.2947 mが求められる。この値は従来各条坊関係の遺構の調査で確認している基準尺 0.295 ～ 0.296 mよりも若干小さいが、近い値を示すといえよう。また近隣の五条五坊七・十坪の調査で検出した五坊々間路心の朱雀門心までの距離は、8100 尺＝ 2391.297 mであり、 0.2952 mの単位尺を得ている。両者が近似した値をしめすことにより、今回検出の道路遺構も条坊計画にのる施工であることを計算上改めて確認することができた。単位尺の数値に若干の開きがあるのは、条坊計画の南北方向 (国土方眼方位に対してN O°15′41″W) と東西方向 (同じくE O°4′～O°19′N) の振れの違い、施工誤差、坊間距離の違い等に関係するものと思われる。坊間路の条坊遺構としては、前述の東四坊々間路の他に、西二坊々間路[(2)]、西四坊々間路[(3)]、東二坊々間大路[(4)]などがあるが、数は少なく、特に今回のように両側溝が確認できた例は少ない。条間路、坊間路の幅員が京内の場所によって異なるという所見もあり、今回両側溝を検出したことにより、初めて東四坊々間路の道路心ならびに、幅員が確定したわけである。

東四坊々間路心	－ 146, 606. 500	－ 16, 725. 500	今回の実測値
東五坊々間路心	－ 147, 279. 000	－ 16, 189. 130	
朱 雀 門 心	－ 145, 994. 490	－ 18, 586. 310	

2. 九坪周囲の条坊復原

平城京左京四条四坊九坪は、北で三条大路、西で東四坊々間路に面し、東と南でそれぞれ十六坪・十坪との坪境小路に面している。ここでは、九坪をとり囲むこれらの条坊道路の位置を復原し、調査区の九坪に占める位置を明らかにしたい。

前節において、道路遺構SF 2400が九坪の西を限る東四坊々間路であることを確認した。これにより九坪の東を画す坪境小路の心は、四坊々間路の心から一町分450尺東に想定することができ、その座標値もほぼ正確に予測できる。坪境小路の計画幅は従来の見解より2丈と考えられるので、九坪の東西長は、坪の計画寸法450尺から四坊々間路幅3丈と小路幅2丈の各½を減じた425尺とみることができる。

次に九坪の北と南を限る東西道路の復原であるが、今回の調査ではその直接の手懸りとなる条坊遺構は検出されていない。そこで従来の調査成果をもとに、いくつかの方法で検討を加えてみることにしたい。九坪の北を画す三条大路の調査例は、これまでに三件[(5)]あるが、いずれも北側溝だけの検出にとどまっている。それらの調査位置は、西一坊と西二坊ならびに東二坊であり本調査区から0.9～3.0㎞離れた位置にある。三次の調査で得られた北側溝心を相互に結んだ振れは、先述した朱雀大路の振れよりも若干大きく、国土方眼に対して東で北に0°19′33″～0°19′50″振れる。三者は直線距離にして1,410ｍほど離れているにもかかわらず、相互の振れの差がわずか12″の範囲内におさまるところから、これを三条大路の振れと仮定することができよう。そこで三者の最長距離間で確認した0°

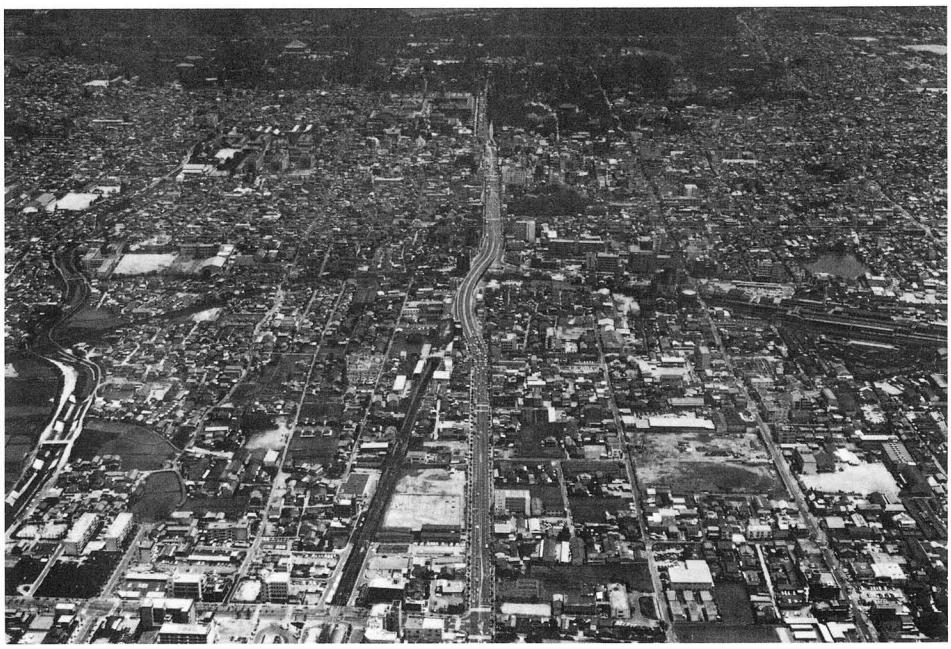


fig.30　調査地周辺航空写真（西北上空より東大寺・興福寺方面を望む）

19′44″の振れで三条大路北側溝を本調査区の北（Y＝－16,690.000）まで延長すると、X＝－146,532.078に北側溝心を求めることができる。三条大路の幅員は未確認であるが、他の大路幅と同じ8丈と仮定すると、道路心は北側溝心の南4丈にあり、X＝－146,543.878に道路心を推定できる。次に近隣地点で検出された条坊遺構の調査成果をもとに三条大路を復原することにしたい。左京における条坊遺構の検出例は右京に比較するときわめて少なく、しかも宮周辺に集中する傾向がある。限られた資料の中で最も四条四坊に近い調査例は1981年に奈良市が行なった五条二坊二・三坪の調査である。この調査では五条々間路の両側溝を検出しており、五条々間路心が確定している。今このデータをもとに基準尺0.295 m、条坊方位の振れをN0°15′41″Wとみて、6町分2700尺離れた三条大路心を算出すると、X＝－146,545.757 m、Y＝－16,690.000 mとなる。この値は、先に三条大路北側溝を延長して求めた値と1.9 mほどの差を生じているが、両者とも現在の『三条通り』の路面上にあたり、『三条通り』が平城京廃都後1200年近くも平城京条坊を踏襲して生残った道路であることが判る。なお九坪の南北長は、坪の計画寸法の450尺から推定大路幅8丈、小路幅2丈の各½を減じた400尺とみることができよう。

1.「平城京朱雀大路発掘調査報告」奈良市　1974
2.「昭和55年度平城宮跡発掘調査概報」－124次－　奈良国立文化財研究所　1981
3.「奈良市埋蔵文化財調査報告」―平城京右京四条四坊五坪調査―奈良市　1980
4.「昭和54・55年度平城宮跡発掘調査概報」－118－23次・123－26次調査―　1980・1981
5.「昭和55年度平城宮跡発掘調査概報」－123－2・123－5次調査―　1981
「平城京左京三条二坊十三坪」奈良県立橿原考古学研究所　1975

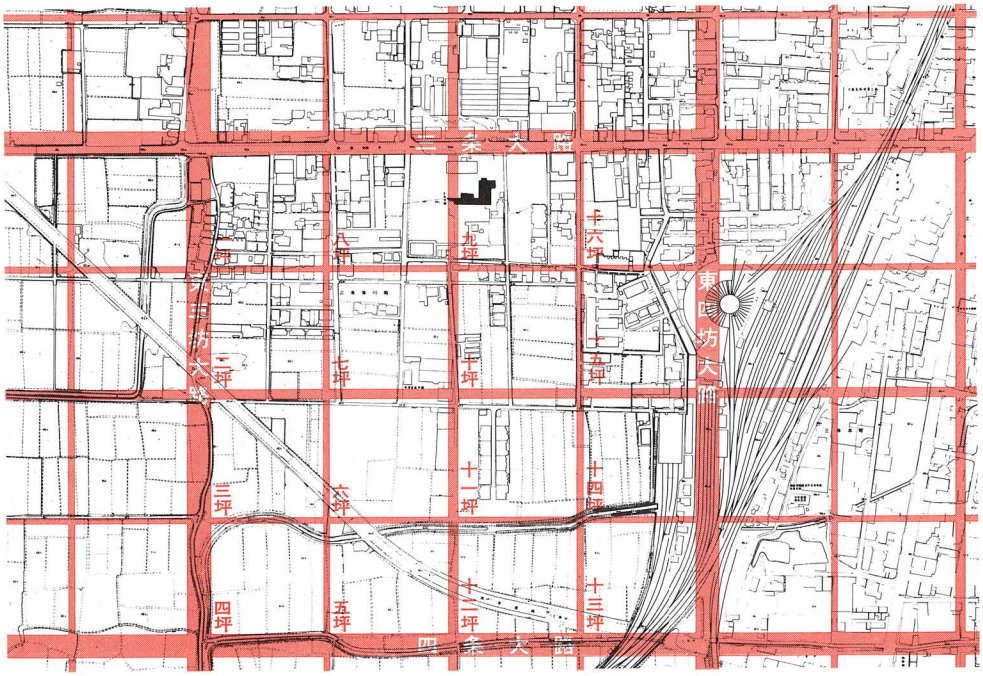


fig.31　調査地周辺の地形と条坊（1/8000）

3. 占地と時期区分

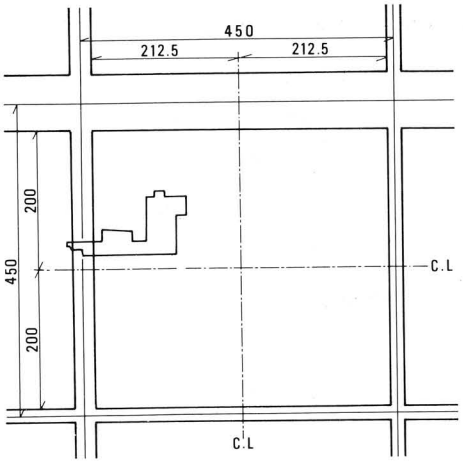


fig.32　九坪の占地概念図

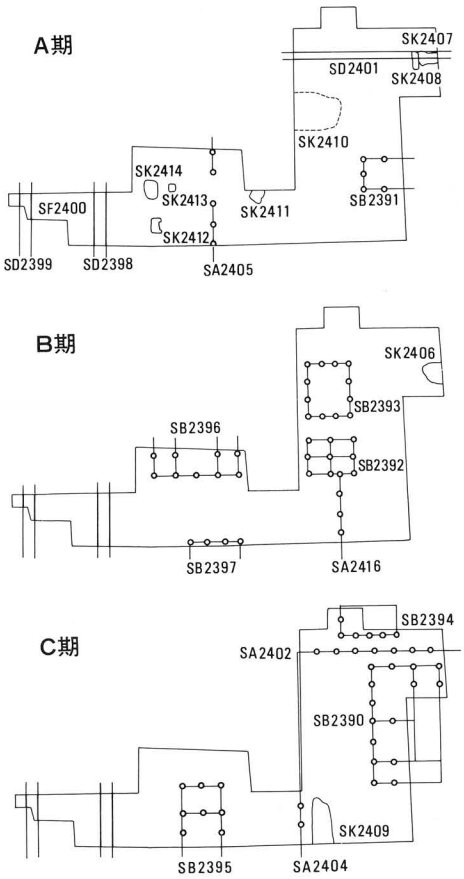


fig.33　遺構の時期変遷図

前節では９坪を囲む条坊道路の位置を想定した。これをもとに今回の発掘調査区の９坪内で占める位置を復原すると、９坪を４等分した場合の北西区画の一部を占めることが判明する（fig. 32・31）。今回の調査では東四坊々間路SF 2400 をはじめ多くの遺構を検出したが、今回の調査が四条四坊における初めての調査でもあり、また調査面積（620 ㎡）が９坪全体の面積（14.800 ㎡）のわずか４％、1/25 にすぎないところから、９坪の大部分の様相はまったくの不明の状態にある。したがって９坪全体でどのような計画のもとに宅地割が行なわれていたかを明らかにすることはできないが、今回の限られた資料をもとに、調査区の土地利用状況を推定し、それがどのような時期変遷を遂げたかを簡単に述べることにしたい。検出した遺構は切合関係・配置関係・出土遺物の検討によって以下のＡ～Ｃ３時期に分けることができる。

Ａ期　Ａ期の遺構には、建物SB 2391、塀SA 2405、溝SD 2398・2399・2401、道路SF2400・2415、土壙SK 2407・2408・2410・2411・2412・2413・2414 がある。Ａ期の宅地を区画する施設としては、未検出ではあったが、四坊々間路の東に想定できる築地塀とＳＡ 2405、東西溝SD 2401 をあげることができる。調査区の東西トレンチで検出した南北方向の掘立柱塀は、東四坊々間路東側溝SD 2398 から東に12.6 m（42.5 尺）離れた位置にあり、これは九坪の東西長 425 尺の1/10長にあたる。またSD 2401 は、Ｃ期の塀SA 2402 同様坪を南北にほぼ四分する位置にあり、坪を南北に四分した土地利用が奈良時代全般を通

じて行なわれたことが判る。南・東の限りについては不明であるが、SA 2405 とSD 2401に囲まれた区画内には小規模な掘立柱建物SB 2391が 1 棟だけ配されており、中心となる建物は調査区域外の東、あるいは南に存在するものと予想される。SA 2405 と先に想定した9 坪を画す南北築地塀との間は、通路として利用されたのであろう。SA 2405 にはそれに開く間口12尺の出入口が認められる。A期の実年代は、A期の宅地割りの廃絶に伴い土壙SA 2410 等に投棄された土器群の年代より、平城京造営当初から天平年間頃までに比定できる。

B期　建物SB 2392・2393・2396・2397、塀SA 2416、土壙SK 2406 がこの時期に属する。B期になると宅地を画していたA期の区画施設を取除き、宅地面積の拡大をはかっている。この時期においても主要殿舎は調査区域外に存在が予想され、調査区内には雑舎建物群がきわめて計画的な配置のもとに建ち並ぶ。すなわち倉庫風の建物SB 2392 とSB 2393 が心をそろえて南北に並ぶとともに、SB 2392 とSB 2396 が南側の柱筋をそろえ、建物の心々距離で 15. 7 m（53尺＝坪東西長⅛）離れて配される。また、SB 2397 はSB 2396 と東側柱列をほぼそろえて配されている。SB 2397 は北側柱列のみの検出にとどまったが、この北側柱列は、先に右京から三条大路北側溝を延長させて求めた三条大路の道路心より南に 65. 75 mの位置にあり、坪計画寸法 450 尺のほぼ½の位置にある。また四坊々間路東側溝から東90尺にあってSB 2392 にとりつく南北塀SA 2416 は、雑舎建物群と居住地区を画す塀と考えられるものである。なお、SK 2406 はB期廃絶時に掘られた塵芥処理用の土壙であり、出土した土器からB期の下限を天平宝字年間に比定することができる。

C期　この時期の遺構には、SB 2390・2394・2395 の 3 棟の建物と、塀SA 2402・2404、土壙SK 2409 がある。C期になると坪を南北に四分する位置に再び東西塀SA 2402 が登場し、その北に東西棟SB 2394、南にSB 2390 が 6 尺の等距離に配される。またSB 2390の西60尺には妻の柱筋をそろえて南北棟SB 2395 が建てられる。東四坊々間路心から90尺、同東側溝から75尺の位置にある南北塀SA 2404 は 3 間しか検出できなかったが、北の延長がSA 2402 の想定柱位置に一致するところから、SA 2402 と連結してSB 2390 を区画する施設になるのであろう。C期の建物は、A・B両期の建物に比べると柱掘形が大きく、柱根・柱痕跡も太いところから居住用の建物と考えられる。南北棟建物SB 2390 は桁行 5 間、梁間 2 間の身舎に二面廂がとりつく建物であるが、従来の平城京の調査例では東西棟が主殿となる例が多く、建物の規模形式からみてもこの建物を主殿と考えるよりは、やはり東あるいは南に存在が予想される主殿に対する脇殿的な建物とみた方がよいだろう。なおC期の年代はSK 2409 出土土器から、下限を奈良時代末頃におくことができる。

平安時代以降　この地区は平城京廃絶後には宅地としての生命を終え急速に水田化していったようである。平安時代以降の遺構としては、わずかに瓦器小片を伴う耕作用の東西・南北方向の細溝が、奈良時代遺構面の直上から多数検出されたにすぎない。その後、1928年に白藤学園がこの地に移転するまでの約1100年の間、周囲はのどかな田園風景をとどめていたものと思われる。

4. 左京四条四坊の居住者と京内の宅地構成

A 左京四条四坊の居住者

平城京左京四条四坊を本貫地とする人物としては、史料の上で次のような人びとが認められる。

太安萬侶 『古事記』や『日本書紀』の撰者として著名である。慶雲元年（704）正六位下から従五位下に昇り、和銅4年（711）正五位下から正五位上になっている(『続日本紀』)。同年詔を受けて『古事記』を撰録し、翌和銅5年（712）に献上した。「古事記序」には「和銅五年正月廿八日正五位上勲五等太朝臣安萬侶」と記している。霊亀元年（715）には従四位下に、同2年には太氏の氏長となった。そして養老7年(723)、民部卿従四位下で卒したのである(『続日本紀』)。1979年に平城京の東方山間部（奈良市此瀬町）の丘陵斜面から、安萬侶の墓誌が出土したことは記憶に新しい[(1)]。墓誌の銘には

左京四條四坊従四位下勲五等太朝臣安萬侶、癸亥年七月六日を以て卒す　養老七年十二月十五日乙巳

とあり（fig. 34）、安萬侶が左京四条四坊に籍を置いていたことが知られた。

fig.34　太安萬侶墓誌

奈良日佐牟須万呂 正倉院文書の丹裏古文書中の天平17年（745）正月12日玉祖人主優婆塞貢進文(『大日本古文書』25巻104頁）で貢進された奈良日佐浄足の父であり、「左京四條四坊戸主従八位上奈良日佐牟須万呂」とみえる。

丹波史東人 同じく正倉院文書の天平18年（746）以前の優婆塞貢進文案(『大日本古文書』24巻299頁)で貢進された丹波史年足の戸主として「左京四條四坊戸主丹波史東人」とある。

穂積加古 『日本高僧伝要文抄』第三に、延暦僧録第五から清勤の僧としての「居士加古伝」を引いており、伝のはじめに、

又云く。居士加古は、俗姓穂積朝臣。左京四條四坊の人。

と記している。穂積加古は在俗の時延暦2年（783）に正六位上から従五位下に昇り、主税頭となり、翌年散位頭となっている(『続日本紀』)。本貫を左京四条四坊とするのは、平城京においてのことの可能性がある。

以上の四名であるが、これらの人物も本貫地がすなわち居住地であったかどうかは不明であり、さらに居住したとしても四坊のうちの何坪に住み、どの程度の広さの宅地を持っていたかは、残念ながら史料からは知ることができない。

B　平城京における宅地構成

平城京における宅地のあり方については、その詳細を示す史料はない。しかし他の都城の場合をみると、藤原京の時に「詔して曰く。右大臣に宅地四町を賜う。直広弍以上には二町、大参以下には一町。勤以下無位に至るまでには、其の戸口に随え。其れ上戸に一町、中戸に半町、下戸に四分の一。王等も亦此れに准ぜよ。」（『日本書紀』持統５年〔691〕12月乙巳条）とあり、また難波京では「難波京に宅地を班ち給う。三位以上は一町以下、五位以上は半町以下、六位以下には一町を四分するの一以下。」（『続日本紀』天平６年〔734〕９月辛未条）とするように宅地を班給しているのである。平城京における宅地も、同様に位階に応じて班給されたものと推測されるが、その実態はなお詳かではない。[2]

ここでは、史料とこれまでの発掘成果をもとに、平城京の宅地のあり方を再検討してみることにしたい。fig. 35は、史料をもとに平城京内に本貫ないし家地をもった人びとの位階の分布を図示したものである。例が少ないなどの限界はあるが、五位以上クラスの高位の人が平城宮に近い立地に宅地を占めたということがうかがえよう。

一方、近年の平城京内における発掘調査の成果によって、宅地の占地状況・宅地割の実態を直接に知ることができるようになった。遺構として確かめられた京内の宅地割の状況は、tab. 4のようにまとめられる。これによると、広い区画を占める宅地が平城宮近くに、小さく区分された宅地が宮から離れて確認されているという傾向を認めることができよう。もちろん奈良時代の間に区画を変更した例も少なくなく、さらに宅地の伝領という要素も考えれば、居住者の位階と宅地の広狭や立地とは必ずしも直接に結びつくわけではない。しかし、上述の京内貫籍者の位階の分布と発掘調査による宅地割の事例とが同様の傾向をもつことは、京内の宮に近い地域に高位者の宏壮な邸宅が多いという宅地構成を推定させよう。その点からすると、今回調査した左京四条四坊は、例えば従四位下の太安萬侶クラスの人びとの居住した地としてふさわしい位置にあるということができそうである。

その後左京四条四坊の地は、長岡京・平安京への遷都の後やがて水田化していった。十三坪の地は平安〜鎌倉時代に（ａ）東大寺領梨原庄の水田一町百歩となっている。また四坪内の字樋爪の地２段については東大寺文書に土地売券等が残されている。[3] それによると（ｂ）永仁４年（1296）、（ｃ）康永元年（1342）には「左京四条四坊四坪内」と注記された田地が、（ｄ）応安６年（1373）の寄進状では「字樋爪」とのみ示されている。この頃からこの地が平城京の左京四条四坊であったという記憶は失われていったのであろう。

1. 奈良県立橿原考古学研究所編『太安萬侶墓』（1981年）。
2. 大井重二郎『平城京と条坊制度の研究』（1966年）、秋山国三「平安京における宅地配分と班田制」（秋山国三・仲村研『京都「町」の研究』1975年、もと『社会科学』10号　1968年）、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（1975年）。
3. （ａ）『東大寺要録』諸院章第四西南院条、（ｂ）永仁４年３月23日亀松女田地売券　東大寺文書第71巻596号（『大日本古文書　家わけ第18　東大寺文書』８所収）、（ｃ）康永元年12月５日春松丸田地売券　東大寺文書第62巻477号（同上７所収）、（ｄ）応安６年９月２日西阿弥陀仏五部大乗経并田地寄進状　東大寺図書館架蔵薬師院文書第１部29・30号。

	右京				左京						
	4坊	3坊	2坊	1坊	1坊	2坊	3坊	4坊	5坊	6坊	7坊
北辺											
1条		**正5上**		平城宮		正1	**正5上** **従5上**				
2条			**正2**						**従 3**		**(従5下)**
3条		従6上 少初上	**従4下**		大初下	**従5下** 従8上	**正5下**				
4条	従6下			従7上 外従5下		**正 1** **正5上**		**従4下** **(従5下)** 従8上			
5条			**1 品** 正6上 正8上		正6上	正8下	**正4下** 正6上 少初上	大初下			正7下
6条		従7上 大初下			大初下	外従5下 従7上	外従5下 従6上				
7条		正8上			外従5下						
8条		少初上	大初下	従7下 大初上	正6下		従8上	正7下			
9条	従7下 少初下		従7上					従8下			

fig.35　平城京貫籍者の位階の分布（従四位下を従4下と記す。位は極位・太字は五位以上）

京内条坊		時代	宅地割	文献
左京	1条3坊15・16坪	奈良初期	2町	『平城宮発掘調査報告VI』1975年
	3条1坊　14坪		2町か	『奈良国立文化財研究所年報1968』1968年
	3条2坊　6坪	奈良時代	1町（以上）	『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976年・1980年
	3条2坊　9坪	奈良後半	1町かそれ以上	『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和54年度』1981年
	3条2坊　15坪	～8世紀末 8世紀末～	1町 東西½町	『平城京左京三条二坊』1975年
	3条4坊　7坪	奈良初期～後期 奈良末期～	南北½町 1町	『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980年
	5条1坊　4坪		¼町	『昭和49年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1975年
	5条2坊　14坪	～天平末年 ～延暦3年	南½町、北¼・¼町 1町	『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和54年度』1981年
	8条3坊　9坪	Ⅰ期 Ⅱ・Ⅲ期	東半 1/8町 南から1/8・1/16・1/16・1/16町	『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年
	8条3坊　10坪	Ⅰ期 Ⅱ期～	東半 ¼町 ⅛町	同　上
右京	2条2坊　16坪	奈良前半 奈良後半	½町かそれ以下 ½町かそれ以上	『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』1982年
	5条4坊　3坪	奈良前半	¼町以下	『平城京右京五条四坊三坪発掘調査概報』1977年
	8条2坊　12坪	730 ～，750 ～	南北¼ないし⅛町	『平城京西市跡』1982年

tab. 4　平城京の宅地割遺構

5. 結　語

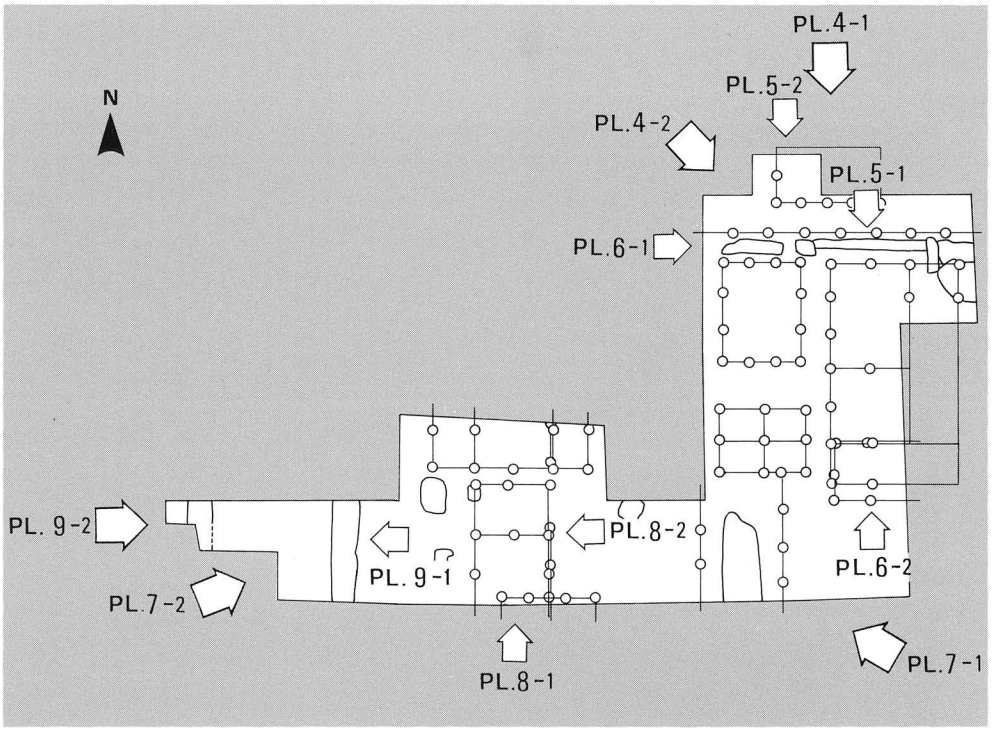
今回の調査は、国鉄奈良駅西辺地域における初めての本格的な発掘調査であった。調査地は1979年に奈良市此瀬町の茶畑から発見された太安萬侶の墓誌に記されている平城京左京四条四坊にあたり、調査に大きな期待と関心がもたれた。調査は坊内九坪の西北部 620㎡について行ない、前節までに述べたような多くの調査成果を得ることができた。以下に調査成果の簡単なまとめを行ない結語とする。

九坪で検出した主要遺構はすべて奈良時代の遺構であり、その重複関係や配置状況、出土遺物の検討からA・B・Cの三時期にわたる変遷が認められた。A期（奈良時代前半）の東西溝SD2401は、坪のほぼ北¼に位置しており、宅地割のための区画溝と考えられる。調査区内には小規模な東西棟建物SB2391が1棟しかみられず、中心建物は調査区域外に予想されるが、A期の宅地割を¼町もしくは⅛町に想定させるものとなっている。B期（奈良時代中頃）になると、坪を分割する区画溝が廃され、少なくとも九坪西半部は一体の宅地となる。調査区内には雑舎しかみられないが、それらは一定の配置計画のもとに建ちならび、½町以上の整然とした宅地利用が推測される。このB期の宅地割はC期（奈良時代後半）にも引継がれるが、C期になると建物の配置に大きな変更がみられる。すなわち調査区内には雑舎と主要殿舎を限る内柵（SA2402・2404）がL字形にめぐり、内柵の中に二面廂つきの南北棟建物SB2390が配される。このSB2390は建物の規模・形式からみて、主殿に対する脇殿的な性格の建物と考えられ、この建物の東もしくは南の調査区域外に主殿の存在が予想される。以上のように、九坪の宅地割と宅地利用状況の一端を明らかにすることができたが、調査面積が九坪全体の1/25にすぎないところから今後に残された問題も多い。九坪をふくむ周辺地域の調査の進展が待たれる。

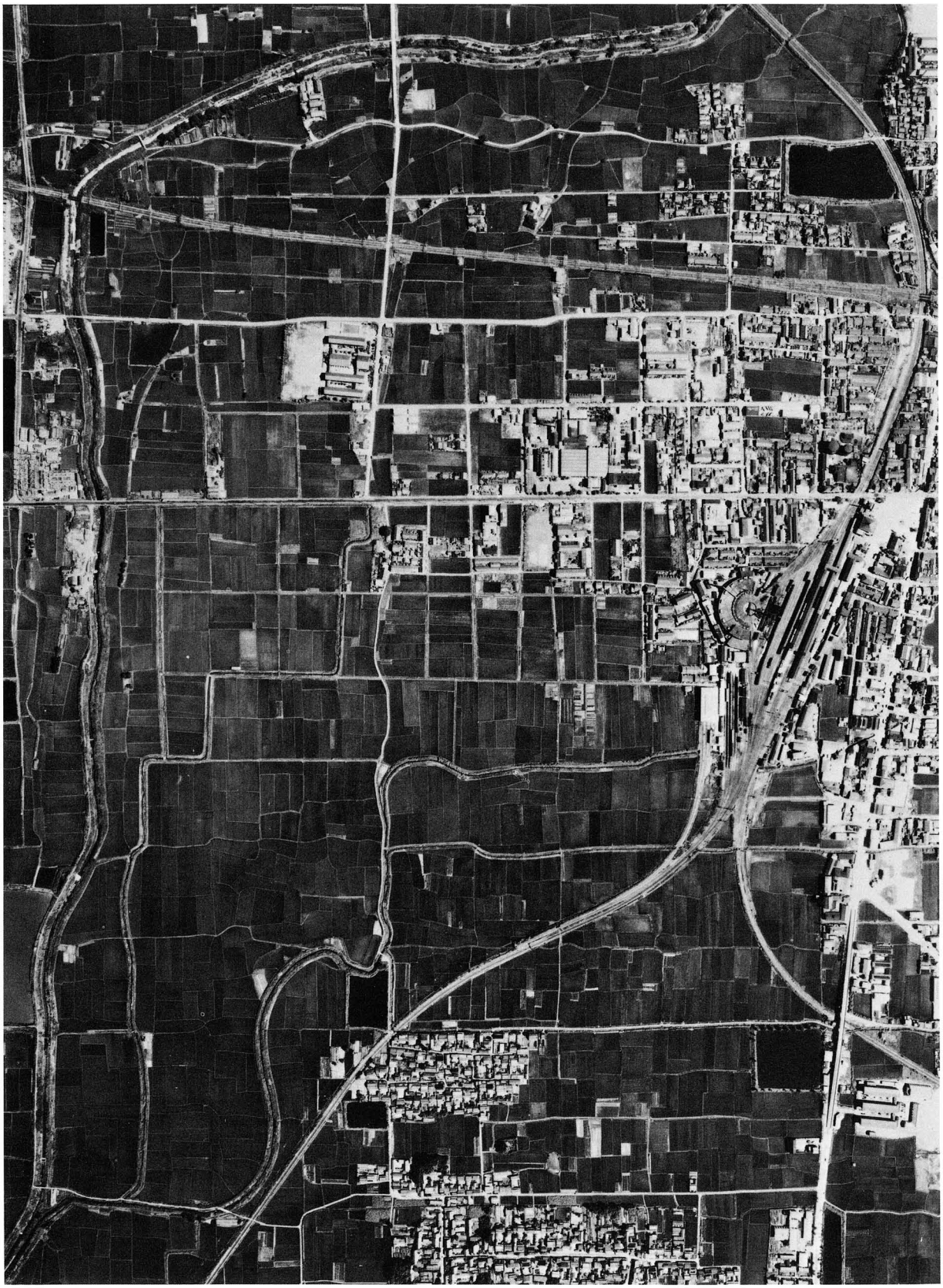
出土遺物の中で注目すべきものに羊を形どった須恵質の形象硯がある。奈良時代の日本に羊は生息しておらず、古くは推古7年（599）に駱駝や白雉などとともに2頭の羊が百済から献上された（『日本書紀』）のを初め、弘仁11年（820）にも新羅の一行によって羊が進上されており（『日本紀略』）、羊が珍獣として扱われていたことがわかる。中国における飼育の歴史は古く、霊獣として吉祥図に描かれたり種々の器物の重要な装飾要素となっている（fig. 24A）が、その源流は遠く西アジアまで辿ることができる。わが国では、正倉院に残存する銀壷の狩猟文（fig. 24B）や十二支八卦鏡、羊木蔦纈（ろうけち）屏風などにわずかに羊文様がみられるものの、今回の羊形硯のように立体的な造形品は初めての例であり、東西文化の交流史の上からも貴重な遺物といえよう。この硯の出土は、当地に高位の文筆家が居住したことを示唆するものとして注目を集めたが、今回の調査では当地が先述した太安萬侶の邸宅の一部に該当するという積極的な資料を得ることができなかった。今回の調査を契機に、周辺地域の調査の進展が望まれるところである。

1. 天平時代の食器構成

2. SK2408銅銭出土状態



写真撮影方向



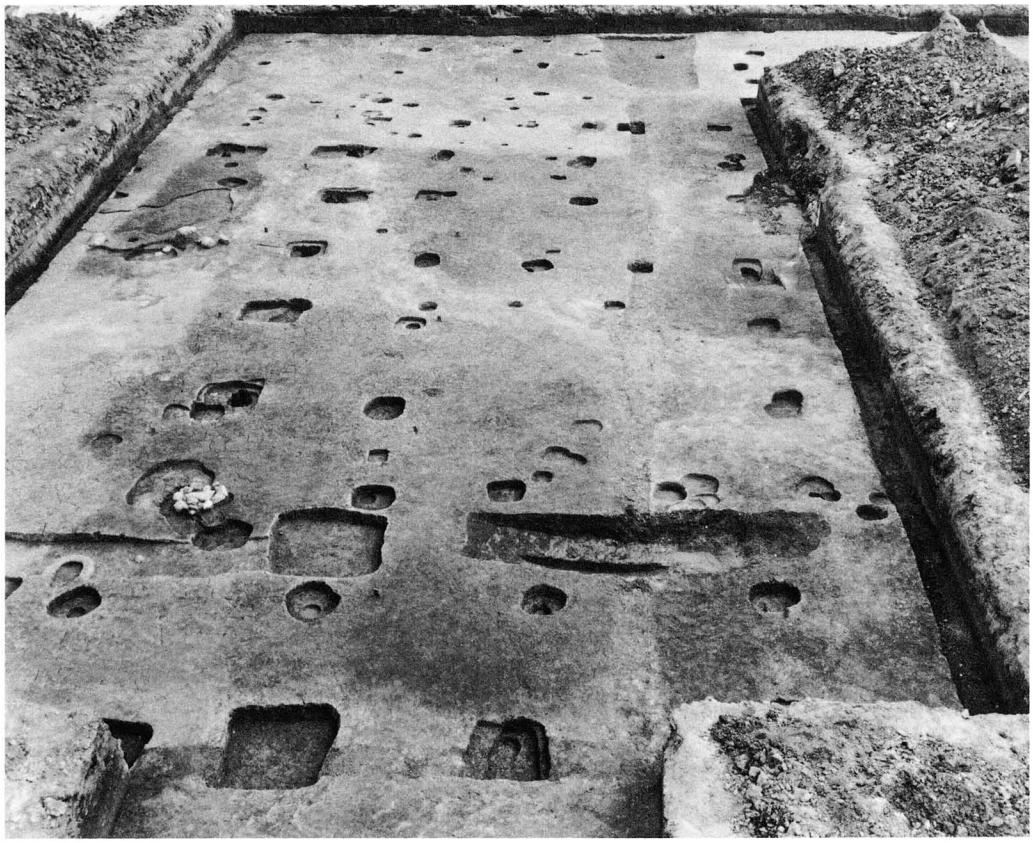
調査地周辺航空写真（昭和30年撮影 1/7000）

調査地周辺航空写真（昭和37年撮影　1/3000）

1. 調査区東半部全景（北から）

2. 調査区東半部の遺構（北西から）

1.　ＳＢ2390（北から）



2.　ＳＢ2392・2393（北から）

1. ＳＤ2401・ＳＡ2402（西から）

2. ＳＢ2390（南から）

1. 調査区西半部全景（南東から）

2. 調査区西半部の遺構（西南から）

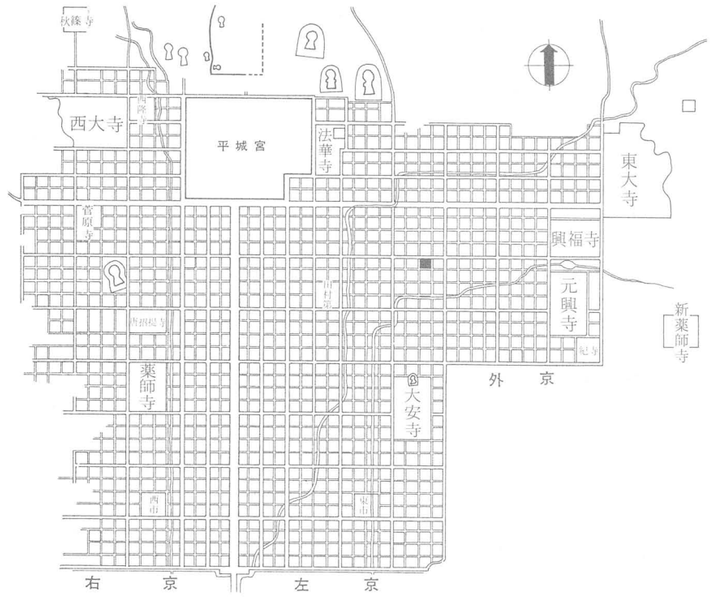
1.　SB2395・SB2396・SA2405（南から）

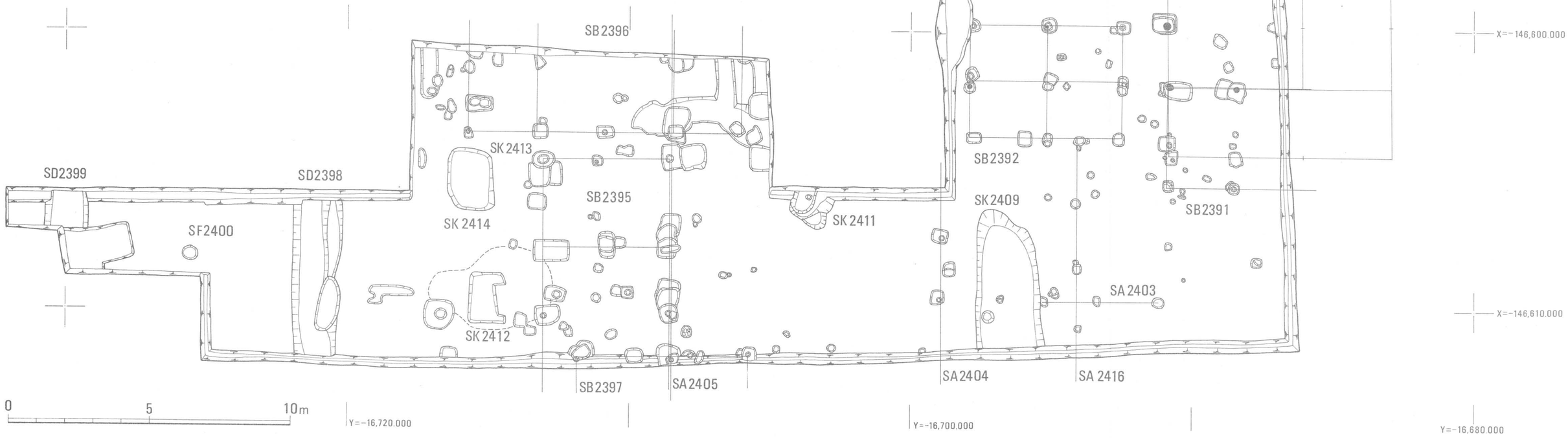
2.　SB2395・SA2405（東から）

1.　東四坊々間路（東から）

2.　東四坊々間路と西半部の遺構（西から）

平城京左京四条四坊九坪実測図





平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告

昭和58年3月25日　印刷
昭和58年3月31日　発行

編　集　奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号

発　行　奈良県教育委員会
奈良市登大路町

印　刷　奈良明新社
奈良市橋本町36番地